島本町文化財調査報告書　第 16 集

大藪浄水場ろ過池更新工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

広瀬遺跡発掘調査報告書

平成22年9月

島本町教育委員会

序　　文

島本町には、たくさんの遺跡が点在し、歴史を伝える数多くの文化財が存在しています。これらの文化財を守り、伝えていくことは、現代を生きる私たちの重要な責務です。本町では、平成20年７月に島本町文化財保護条例を施行し、住民共有の歴史文化遺産を広く住民の方々に公開し、文化財や歴史に対する意識と関心を高め、個性豊かな町づくりを推進しています。また、埋蔵文化財について包蔵地の周知と保護を行うとともに、未だ遺跡の確認されていない地域での調査も実施し、新たな埋蔵文化財の発見に努めています。

本書は、島本町広瀬三丁目にあります島本町水道事業が計画しました大薮浄水場ろ過池更新工事に伴う埋蔵文化財発掘調査として、平成21年１月30日から平成22年９月10日まで実施しました広瀬遺跡発掘調査の成果を報告するものです。

調査地の北側には、後鳥羽・土御門・順徳の三上皇を祀る水無瀬神宮があり、後鳥羽上皇の造営した水無瀬離宮に関して、その建物の規模や様子について古くから大きな関心が寄せられてきました。今回の調査では残念ながら離宮に関しての遺構の発見はできませんでしたが、今後も離宮造営の重要な地域として調査を続けてまいりたいと思っています。

最後になりましたが、調査にあたりまして、多大なご指導、ご協力を賜りました関係諸機関の皆様、また発掘調査にご理解、ご協力いただきました近隣の皆様方には紙面をおかりして、深く感謝しお礼を申し上げますとともに、本町の文化財保護行政に対し、今後とも、ご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成22年９月

島本町教育委員会

教育長　森 川 正 啓

例　言

1. 本書は、平成20年度島本町水道事業が行う大藪浄水場ろ過地更新工事に伴う埋蔵文化財包蔵地内発掘調査として、大阪府教育委員会事務局文化財保護課の指導のもと、島本町教育委員会が実施した広瀬遺跡発掘調査報告書である。
2. 調査は、島本町教育委員会事務局生涯学習課嘱託職員久保直子を主担当者とし、補佐担当者として若林純也、大西健吾が調査を行った。
   平成21年1月30日に着手し、平成22年9月10日に本書の刊行を以って完了した。
3. 調査及び整理作業にあたっては、下記の調査員及び調査補助員の参加を得た。(順不同)
   【調　査　員】　久保 直子　若林 純也　大西 健吾
   【調査補助員】　海原 良二　正木 靖彦　竹谷 俊彦　長尾 健司
4. 本書の執筆は久保・若林・大西が行い、作成・編集は大西を中心に行った。
5. 本調査に関わる資料の保管と活用及び本調査によって作成された資料などの管理は、島本町教育委員会がこれにあたる。
6. 現地作業及び整理作業においては、関係機関ならび、方々には貴重なご指導ご教示を賜った。記してここに感謝の意を表します。
   大阪府文化財保護課、(株)ピーエス三菱、東海アナース(株)

凡　例

1. 本書に用いた標高は、東京湾平均海水面（T．P．〔Tokyo Peil〕）を基準とした数値である。方位は、国土座標第Ⅵ系における座標北である。
2. 土層断面図の土色は、小山正忠・竹原秀夫編『新版標準土色帖』第12版を使用した。
3. 遺構記号については、以下の通りである。
   ＮＲ：自然流路　ＳＰ：ピット　ＳＢ：掘立柱建物　ＳＫ：土坑
   ＳＤ：溝　ＳＥ：井戸　ＳＸ：性格不明遺構
4. 本書で使用している北は、特に断りのない限りは「真北」を示す。

目　次

序　文
例　言
目　次
第１章　はじめに
　第１節　島本町の地理的概要……1
　第２節　島本町の歴史的概要……1
第２章　調査の概要
　第１節　調査に至る経緯 ……4
　第２節　広瀬遺跡　第１期発掘調査……5
　第３節　広瀬遺跡　第２期発掘調査……5
第３章　調査の成果
　第１節　基本層序…… 12
　第２節　検出遺構
　　（１）第１遺構面…… 12
　　（２）第２遺構面…… 19
　第３節　出土遺物…… 21
第４章　まとめ
　第１節　第１遺構面の粘土採掘土坑について…… 27
　第２節　第２遺構面の縄文土器について…… 29

挿図目次

第１図　島本町内文化財分布図（１／25,000）…… 3
第２図　調査地位置図（１／2,500）…… 4
第３図　調査地区割図（１／200）…… 6
第４図　第１遺構面　遺構平面図（１／100）…… 7・8
第５図　第２遺構面　遺構平面図（１／100）…… 9・10
第６図　調査区土層断面図（１／50）…… 11
第７図　第１遺構面　遺構断面図①（１／50）…… 14

第８図　第１遺構面　遺構断面図②・柱穴実測図（１／50・１／20）…… 15
第９図　ＳＢ 01 実測図（１／50）…… 16
第 10 図　ＳＥ 01 実測図（１／20）…… 17
第 11 図　ＮＲ 01 断面図（１／50）…… 18
第 12 図　第２遺構面　遺構平面・断面図（１／50）…… 20
第 13 図　粘土採掘土坑出土遺物（中世）（１／４）…… 22
第 14 図　粘土採掘土坑出土遺物（近世以降・その他）（１／４・１／２）…… 23
第 15 図　ＳＥ 01 出土遺物（１／２・１／４・１／８）…… 25
第 16 図　第１遺構面その他出土遺物（１／４）…… 26
第 17 図　第２遺構面出土遺物（１／４・１／２）…… 26

付　　表

付表１　出土遺物観察表 …… 31

図版目次

図版１　調査区遠景
１．水無瀬神宮・天王山方面を望む（南から）
２．淀川方面を望む（北西から）
図版２　第１期調査区全景
１．第２工区　第１遺構面（南から）
２．第１工区　第１遺構面（南から）
３．第２工区　第２遺構面（南から）
４．第１工区　第２遺構面（南から）
図版３　調査区基本層序
１．調査区土層断面（１）（東から）
２．調査区土層断面（２）（東から）
図版４　掘立柱建物　ＳＢ 01
１．ＳＢ 01 全景（南から）

２．ＳＰ 05 根石検出状況（北から）
３．ＳＰ 05 土層断面（南から）
４．ＳＰ 17 根石検出状況（北から）
５．ＳＫ 07 遺物出土状況（北から）
図版５　第１遺構面・第２遺構面　遺構
１．ＳＫ 01 土層断面（南東から）
２．ＳＫ 02 土層断面（西から）
３．ＳＫ 01 草履出土状況
４．ＳＫ 03・ＳＫ 04 土層断面（南東から）
５．ＳＫ 10 土層断面（西から）
６．ＳＰ 29・ＳＰ 30 土層断面（西から）
７．ＮＲ 01 検出状況（西から）
８．ＮＲ 01 完掘状況（西から）
図版６　第２遺構面　遺構・作業状況
１．ＳＸ 01 土層断面（南）（北から）
２．ＳＸ 01 土層断面（北）（北から）
３．ＳＸ 01 全景（南から）
４．石鏃出土状況
５．粘土採掘土坑掘削作業
６．ＮＲ 01 掘削作業
７．遺構測量作業
８．空撮作業
図版７　第２期調査区全景
１．第３工区　第１遺構面（南西から）
２．第３工区　第２遺構面（北西から）
図版８　第１遺構面　遺構
１．ＳＫ 11 土層断面（南西から）
２．ＳＫ 11 完掘状況（南西から）
３．ＳＫ 12 土層断面（西から）
４．ＳＫ 12 完掘状況（西から）
５．ＳＫ 11 遺物出土状況（北東から）

６．ＳＫ 12 遺物出土状況（北東から）
７．ＳＤ 03 土層断面（南から）
８．ＳＤ 03 完掘状況（南から）
図版９　第２遺構面　遺構
１．ＮＲ 01 検出状況（西から）
２．ＮＲ 01 完掘状況（西から）
３．ＮＲ 01 土層断面（東から）
４．ＳＸ 02 土層断面（南から）
５．ＳＸ 03 土層断面（南から）
６．ＳＸ 04 完掘状況（北西から）
７．ＳＰ 63 土層断面（西から）
８．ＳＰ 63・ＳＸ 03 完掘状況（南西から）
図版 10　井戸　ＳＥ 01
１．ＳＥ 01 完掘全景（南西から）
２．ＳＥ 01 検出状況（北西から）
３．井戸内遺物出土状況（南東から）
４．ＳＥ 01 土層断面（南から）
５．ＳＥ 01 掘り方完掘状況（南から）
図版 11　第１遺構面出土遺物（１）
１．土師器皿
２．弥生土器・須恵器・土師器
図版 12　第１遺構面出土遺物（２）
１．瓦器・瓦質土器
２．白磁・青磁
図版 13　第１遺構面出土遺物（３）
１．国産陶磁器
２．瓦・土製品・ガラス製品・ＳＥ 01 土師器皿
図版 14　第１遺構面出土遺物（４）・第２遺構面出土遺物
１．ＳＥ 01 木製品・石鏃
２．縄文土器

第１章　はじめに

第１節　島本町の地理的概要

大阪府三島郡島本町は、大阪府の北東端に位置する面積 16.78 ｋ㎡の町である。北は京都市右京区、東は京都府乙訓郡大山崎町・長岡京市、東南は八幡市、西は高槻市、南は淀川を境界として枚方市に隣接している。町の面積の約７割を山岳丘陵地が占め、天王山の南側に広がる平坦地に市街地を形成している。標高は一番低い所が淀川で９ｍ、高い所は釈迦岳で 631 ｍである。大阪・京都の府境は淀川をへだてて対立する天王山と男山丘陵との間の、地形的に山崎狭隘部と呼ばれる部分を南北に走っている。また、町域の東南部では、京都盆地の南西より流れ出た木津川、宇治川、桂川の三川が合流して淀川となり南流している。

現在、島本町を通過する東海道新幹線、東海道本線、名神高速道路、国道 171 号、阪急電鉄京都線は全国的な鉄道、道路の中心をなしており、また、町の中心を西国街道が貫いている。こうした島本町の地理的位置の重要性は古代より水・陸の両方の交通の要衝として栄えてきた大きな要因となっている。平成 20 年３月にはＪＲ島本駅が開設され、大阪・京都のベットタウンとしても発展している。

自然環境の面でも「大沢のスギ」「尺代のヤマモモ」「若山神社のツブラジイ林」が大阪府の天然記念物に指定されており、豊かな自然が残されている土地でもある。町の花となっている「山吹」は実のある珍しい種類で、尺代の山奥や、山吹渓谷の一帯に群生している。また、水無瀬神宮の「離宮の水」は後鳥羽上皇が造営した水無瀬離宮にちなんで名付けられたと言われており、昭和 60 年７月に　大阪府内で唯一、環境庁認定の「名水百選」に選ばれている。

第２節　島本町の歴史的概要

現在、島本町には多くの周知の遺跡がある。以下にその概要を記述する。

島本町の歴史はサヌカイト製の国府型ナイフ形石器とチャート製の剥片数点が採集されていることから旧石器時代にさかのぼる。（山崎西遺跡）町の西側では、縄文時代後期に相当する鉢・甕や、弥生時代の土器も出土しており、狩猟・採集の時代から集団で稲作を始める頃へと、人々の生活が途切れることなく営まれたことが想像される。近年、ＪＲ島本駅周辺においても弥生時代中期から後期にかけての土器が出土しており、広い範囲で古代から生活が営まれたと考えられる。（桜井遺跡・桜井駅跡遺跡・青葉遺跡）

昭和 35 年の名神高速道路建設時に、桜井地区周辺より古墳時代後期の須恵器や鉄器が表面採集された。これらは、古墳の副葬品である可能性が高いと考えられ、付近に古墳や古墳時代の集落があったことを示している。（越谷遺跡・源吾山古墳群・神内古墳群）昭和 29 年には、町営住宅の宅地造成工事の際、偶然２基の瓦窯が発見された。（鈴谷瓦窯跡）瓦窯に関する資料は、

写真と実測図、出土瓦が数点残されているが正確な位置については不明である。他の瓦窯跡の例を考えれば、他にも窯が存在していた可能性も十分考えられるが、確認はできていない。これらの窯は、奈良時代に東大寺（奈良県）へ瓦を供給したのではないかとされていたが、その後、窯の構造や出土した瓦の調整や形態の調査などから、東大寺建立よりは50年ほど早い操業と考えている。この地の南側では、平成15年に発掘調査が行われ、竈付の竪穴住居跡1棟が検出されており、瓦窯の操業とほぼ同じ時期のものと考えられる。（御所ノ平遺跡）

西国街道を中心に広がる広瀬遺跡でも、奈良時代から江戸時代にわたっての集落跡の存在が確認されており、広範囲にわたって生活の場が存在したと考えられる。水無瀬川の西岸部には、奈良東大寺の正倉院が所蔵する日本最古の絵図「摂津国水無瀬荘図」に描かれる東大寺領の荘園「水無瀬荘」が造営され、この地に国の重要な機関が存在したことを示している。（水無瀬荘跡）

その後、平城京から長岡京、平安京へと遷都されていくにつれ、島本町は水・陸の交通上重要な位置を占めるようになった。『延喜式』にある山崎駅の記述や『土佐日記』『更級日記』などには、淀川の山崎津の賑わう様子が記載されている。平安時代以降には桓武天皇や嵯峨天皇が頻繁に訪れ、王朝貴族たちが好んだ風光明媚な土地として注目されるようになる。中でも後鳥羽上皇は、鎌倉時代のはじめに水無瀬離宮を造営し遊興の時を過ごされた。（水無瀬離宮跡）離宮跡は資料などからその存在は古くから知られていたが、詳細な発掘調査は今までされておらず、広く広瀬遺跡として調査が進められていた。しかし、平成21年に宅地造成に伴う発掘調査で、離宮と同時代と考えられる建物跡や多量の瓦が出土したことから、離宮の構造やその存在について大きな注目を集めることとなった。

また、延元元年（1336）足利尊氏の大軍を迎え撃つため京都を発った楠木正成が長子である正行に遺訓を残して河内へと引き返らせた『太平記』に語られる楠公父子桜井の別れの地として広く世に知られている国指定史跡「桜井駅跡」（楠木正成伝承地）がＪＲ島本駅の東側にある。現在この場所には、楠公父子の別れを顕彰する碑が建てられ、訪れる人が絶えない。またこの場所は、奈良時代の和銅４年（704）に京から西国に向かう道筋に設置された駅（うまや）のひとつである「大原の駅」が置かれたと考えられていて、交通の要衝地として律令国家の中で重要な役割を果たしていたと思われる。（久保）

第１図　島本町内文化財分布図（1/25,000）

1. 山崎古墓　2. 山崎東遺跡　3. 山崎西遺跡　4. 鈴谷瓦窯跡　5. 御所ノ平遺跡　6. 水無瀬荘跡
7. 広瀬遺跡　8. 水無瀬離宮跡　9. 桜井御所跡　10. 桜井遺跡　11. 桜井焼窯跡　12. （伝承地）待宵小侍従墓
13. 桜井駅跡遺跡　⑬［国］史 桜井駅跡（楠木正成伝説地）　14. 御所池瓦窯跡　15. 越谷遺跡　16. 神内古墳群
17. 源吾山古墳群　18. 広瀬南遺跡　19. ［国］重文 水無瀬神宮茶室・客殿　20. ［府指］有文 関大明神社本殿
21. 西国街道　22. ［府指］天 若山神社ツブラジイ林　23. ［府指］天 尺代のヤマモモ　24. ［府指］天 大沢のスギ

第２章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯

本調査事業は、島本町水道事業が行う大藪浄水場ろ過池更新工事（第１期・第２期）に伴う発掘調査である。

調査にあたっては、平成19年10月に埋蔵文化財の届出があり、旧施設の除去工事の進捗状況を考慮しながら、平成20年12月に試掘調査を実施し、平成21年１月に着手した。

今回の発掘調査地は、島本町埋蔵文化財遺跡分布図の中に示す「広瀬遺跡」にあたる。広瀬遺跡は、奈良時代から江戸時代にわたる周知の遺跡で、町内の広瀬地区全域にわたってその存在が確認されている。中でも、広瀬遺跡内に位置する「水無瀬離宮跡」は、離宮造営に関して、その位置や離宮の範囲、また建物の規模などほとんど分かっておらず、古くから調査への関心が持たれてきた地域である。また、最初に水無瀬離宮が造営された場所とされている水無瀬神宮は、調査地から北約100ｍの位置にあり、今回の調査で、離宮に関係する何らかの施設の遺構検出や遺物などの出土が考えられたため、慎重に調査を進めることとした。

発掘調査期間や調査面積は、町内への水道供給を考え、旧施設を取り壊した後、第１期発掘調査を行い、調査終了後、第１ろ過池施設を建設し、水道供給が確認された後、第２期発掘調査を行い、その後、第２ろ過池施設を建設する計画とした。（久保）

第２図　調査地位置図（１／2,500）

第２節　広瀬遺跡　第１期発掘調査

調査期間：平成21年１月30日（金）から５月29日（金）

調 査 地：大阪府三島郡島本町広瀬三丁目　地内

調査面積：331㎡

第１期発掘調査は第１ろ過池施設工事範囲331㎡を対象とし、平成21年２月９日から機械掘削を開始した。機械掘削は、試掘調査の結果から、調査地全体の盛土層（約１ｍ）までとし、この盛土層は場外処分とした。その後、掘削土置場確保のため、調査地を東西に２分割し、東側を第１工区、西側を第２工区とし、第１工区から調査を行った。盛土層を除去すると、包含層はなく、すぐに遺構面となり、この遺構面を第１遺構面とした。遺構面は旧ろ過池施設によりかなりの面積を撹乱されており、連続した遺構の確認は難しかった。その中で、粘土採掘土坑と思われる土坑、掘立柱建物１棟、ピット、自然流路を検出した。２月26日に全景写真・航空測量をラジコンヘリコプターにより行い、第１遺構面の調査を終了した。その後、人力で掘り下げ、30～40cm下層で第２遺構面を検出した。第２遺構面では落ち込み状の遺構と少数のピットを検出した。この第２遺構面の全景写真・航空測量を３月11日に行い、第１工区の調査を終了した。３月12日より反転作業を行い、第２工区の調査を開始した。第１遺構面は第１工区と同じく、粘土採掘土坑と思われる土坑、ピット、自然流路を検出した。３月24日に全景写真・航空測量を行い、第１工区と同様に掘り下げ、第２遺構面を検出した。第１工区から続くと思われる落ち込み状の遺構を検出し、縄文土器・石鏃などが出土した。４月１日に全景写真・航空測量を行い、下層確認調査を行った。なお遺物整理等の作業は併行して行い、５月29日にすべての作業を終了した。（若林）

第３節　広瀬遺跡　第２期発掘調査

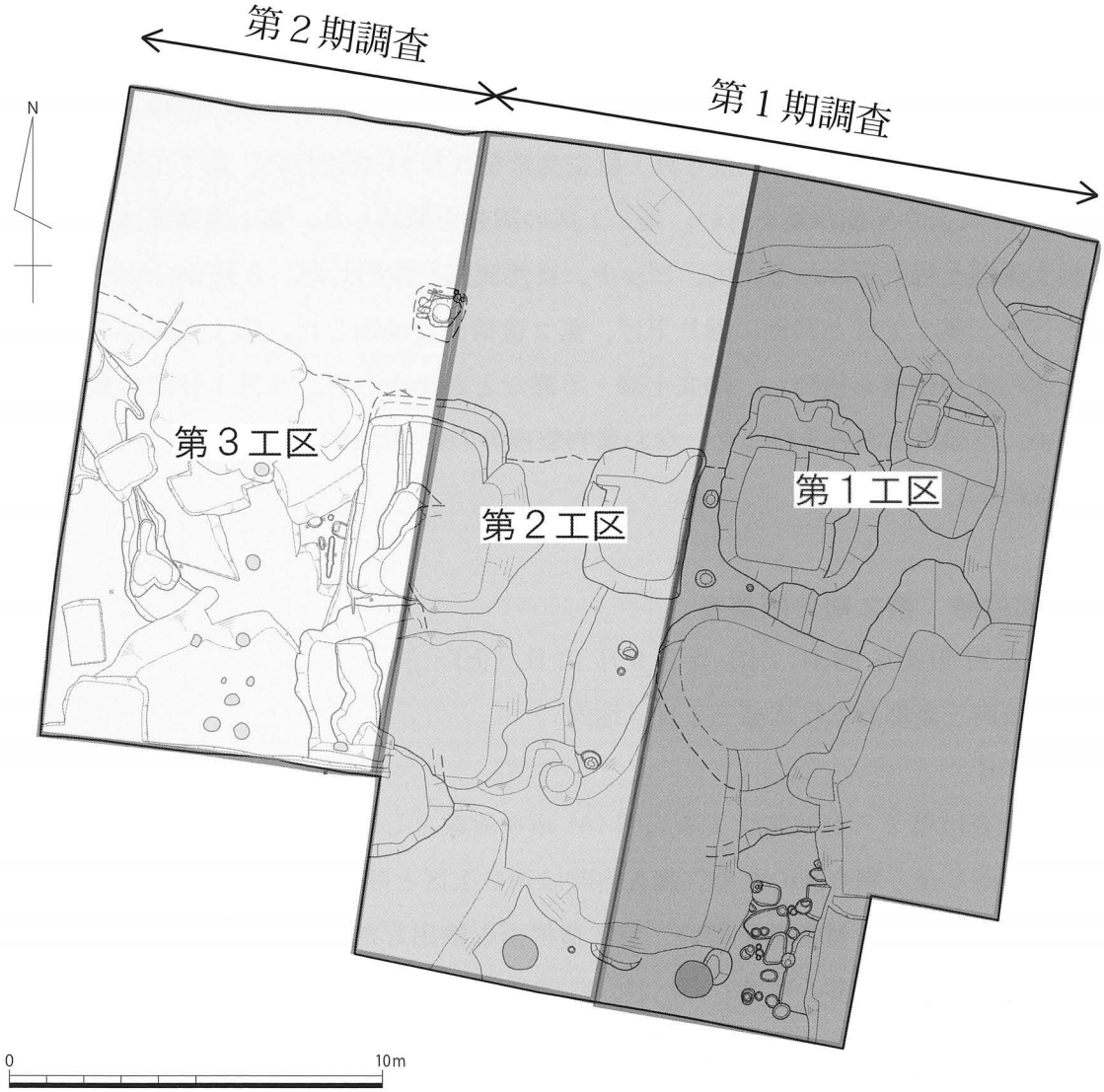
調査期間：平成22年４月28日（木）から９月10日（金）

調 査 地：大阪府三島郡島本町広瀬三丁目　地内

調査面積：161㎡

第２期発掘調査は第２ろ過池施設工事範囲161㎡を対象とした。第１期調査（第１工区・第２工区）の西に隣り合う調査区のため、調査当時は第３工区と呼称した。４月30日から旧施設解体後の表土（盛土）の機械掘削を行い、第１遺構面を検出した。第１期調査同様、旧施設の工事作業と思われる撹乱を多く受けていたが、残存する遺構面や、撹乱抗を取り除いた部分に、第１期調査に続く粘土採掘土坑とみられる土坑や溝、ピットなどの遺構が検出された。遺構を調査・掘削し、図面作成を行い、５月22日に第１遺構面の完掘全景写真・航空測量をラジコンヘリコプターにより行った。引き続き第１遺構面を人力で掘り下げ、第２遺構面を検出した。

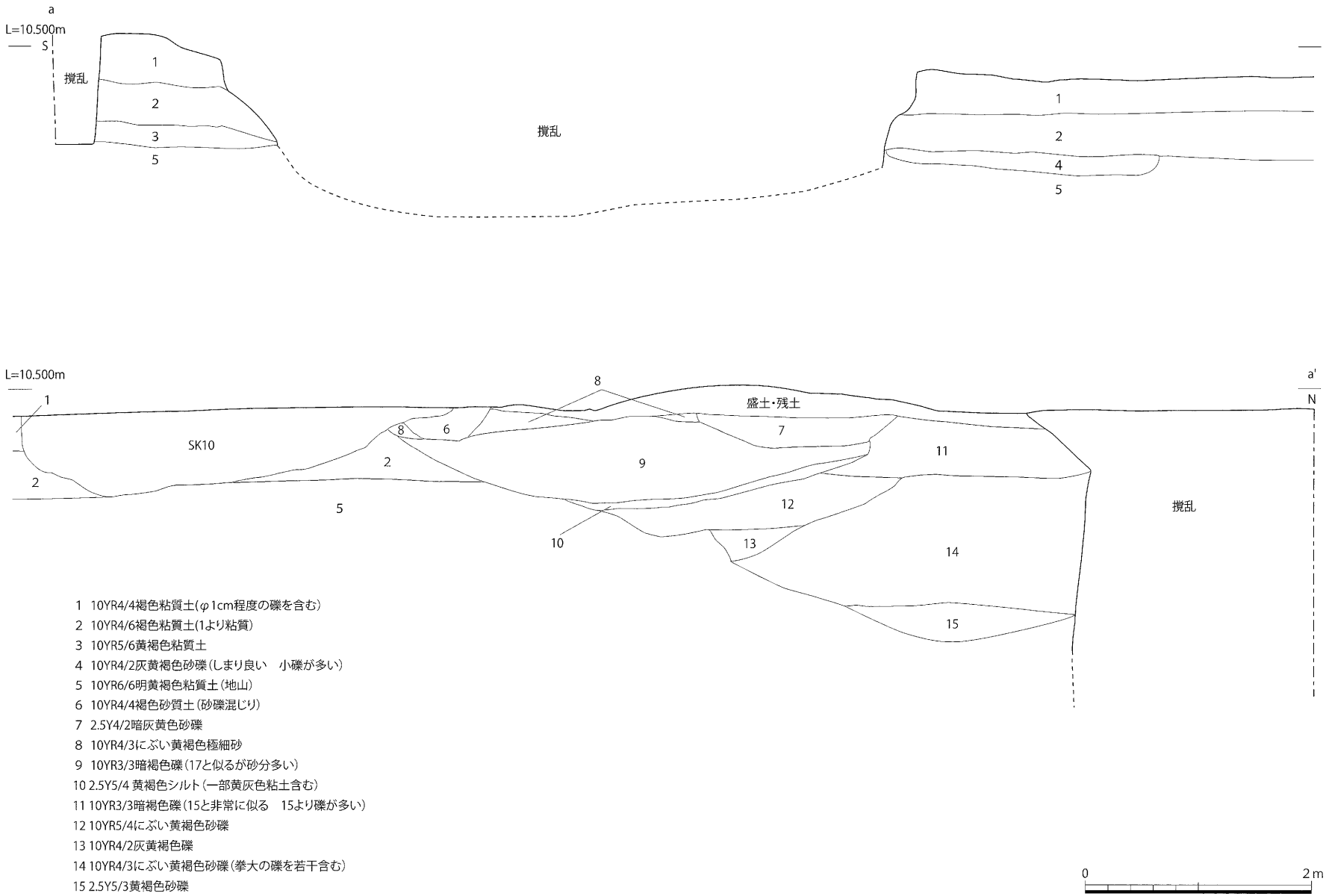
第１期調査と同様、北部に河川氾濫による流路跡、落ち込み状遺構を検出した。第１期調査では縄文土器、石鏃などが出土したが、当調査区では微細な土器の破片が出土したのみで、顕著な遺物は見つからなかった。しかし調査終盤の自然流路掘削中、底付近で石組み井戸の最下部を検出した。この井戸は出土遺物から近世に営まれたことがわかり、氾濫による流路埋没後に設置されたと考えられるものであった。全ての遺構を調査・掘削し、６月３日に第２遺構面の完掘全景写真・航空測量を行い、６月４日に井戸を解体、掘り方を完掘、引き続き下層確認調査を行い、遺構・遺物の存在しないことを確認した。以後整理作業、報告書作成作業を行い、９月 10 日にすべての作業を終了した。（大西）



第３図　調査地区割図（１／200）

第４図　第１遺構面　遺構平面図（１／100）

第５図　第２遺構面　遺構平面図（１／100）



1 10YR4/4褐色粘質土(φ1cm程度の礫を含む)
2 10YR4/6褐色粘質土(1より粘質)
3 10YR5/6黄褐色粘質土
4 10YR4/2灰黄褐色砂礫(しまり良い　小礫が多い)
5 10YR6/6明黄褐色粘質土(地山)
6 10YR4/4褐色砂質土(砂礫混じり)
7 2.5Y4/2暗灰黄色砂礫
8 10YR4/3にぶい黄褐色極細砂
9 10YR3/3暗褐色礫(17と似るが砂分多い)
10 2.5Y5/4 黄褐色シルト(一部黄灰色粘土含む)
11 10YR3/3暗褐色礫(15と非常に似る　15より礫が多い)
12 10YR5/4にぶい黄褐色砂礫
13 10YR4/2灰黄褐色礫
14 10YR4/3にぶい黄褐色砂礫(拳大の礫を若干含む)
15 2.5Y5/3黄褐色砂礫

第6図　調査区土層断面図（1／50）

第３章　調査の成果

第１節　基本層序

調査区の基本層序は、表土・現代盛土の下に褐色粘質土（１）があり、この層の上面が第１遺構面の遺構検出面である。遺物包含層はみられない。その下に（１）よりやや暗く、粘性の強い褐色粘質土（２）が 30cm ～ 40cm の厚みで堆積しており、縄文土器などが含まれている。第２遺構面の遺物包含層と考えられる。その下に礫を多く含む黄褐色粘質土（３）、礫を含まない明黄褐色粘質土（５）があり、これらの層の上面を第２遺構面の遺構検出面とした。以下は無遺物層である。（第６図参照）

第２節　検出遺構

（１）第１遺構面

調査地区のかなりの面積を撹乱されており、連続した遺構の確認は困難であったが、中世後期（室町時代）と近世（江戸時代）の遺構を検出した。主な遺構の概要は次の通りである。

粘土採掘土坑

ＳＫ 01（第４図・第７図）

調査区中央東寄りで検出した。平面形は隅丸方形に近く、南北約 5.0 ｍ、東西約 4.5 ｍを測る。北側の一部が自然流路（ＮＲ 01）の埋没範囲と重なっており、重なった部分はすぐに砂礫層になるためか、掘り込みは浅く、それより南は深く掘り込まれている。最も深いところで検出面より 1.2 ｍを測る。埋土は粘性の強い土に礫が含まれている。出土遺物は弥生土器壺、古墳時代の須恵器甕、中世の土師器皿、瓦器椀、瓦質土器甕、風炉、近世の陶磁器などである。出土遺物の時期の下限からみて、近世の遺構とみられる。また、残存状態はかなり悪いが藁草履が１点出土している。

ＳＫ 02（第４図・第７図）

調査区中央東、ＳＫ 01 の南で検出した。東部、西部両側が現代の撹乱を受けており、全体の形状は不明だが、平面形は楕円形状で南北約 6.0 ｍ、東西残存約 5.8 ｍを測る。こちらは南側の一部の掘り込みが浅く留められている。深さは北側が深く、最深部で検出面より 1.2 ｍを測る。埋土はＳＫ 01 と同様、粘性の強い土に礫を含んだものである。出土遺物は古墳時代の須恵器甕、中世の土師器皿、瓦器椀、近世の肥前磁器染付、丸瓦などで、近世に属する遺構である。

ＳＫ 03（第４図・第７図）

調査区北東部で検出した。中央を現代の撹乱で乱され、東部は調査区外に続くため全体の形状は不明だが、隅丸方形に近いと思われる。南北約 6.5 ｍ、東西 4.5 ｍ以上を測る。こちらも北部が浅く、南部が深い段掘り状の底を呈している。ＳＫ 01 同様、北部はＮＲ 01 にかかるた

め砂礫が多く、浅く留めたと考えられる。最深部は検出面より 0.85 mである。出土遺物は中世の土師器皿、甕、瓦器椀などである。

ＳＫ 04（第４図・第７図）

調査区東端部で検出した。西部をＳＫ 02 に切られる。南部の大半が現代の撹乱を受けており、全体の規模は不明である。平面形は楕円形状で南北残存約 3.0 m、東西残存約 3.5 mを測る。深さは検出面より約 1.6 mである。出土遺物は中世の土師器皿などである。ＳＫ 02 より古いため、近世もしくは中世に属する可能性がある。

ＳＫ 10（第４図・第７図）

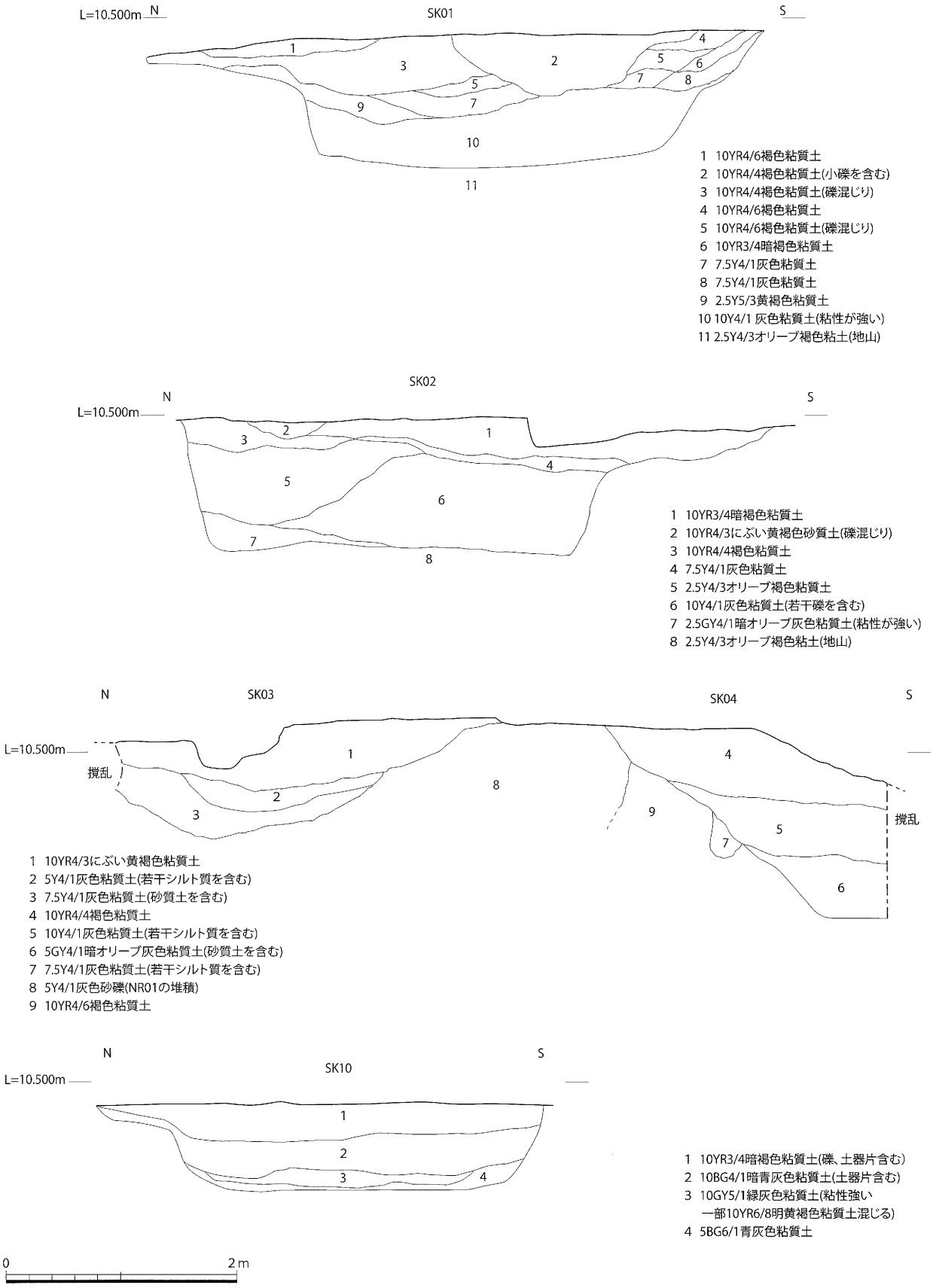
調査区中央、ＳＫ 01 のすぐ西で検出した。南北約 3.7 m、東西約 3.0 mを測る。北辺部がＮＲ 01 の肩と接しており、ＮＲ 01 を避けて掘られていることがわかる。深さは検出面より約 0.8 mである。出土遺物は古墳時代の須恵器甕、古代の須恵器坏、中世の土師器皿、瓦器椀、瓦質土器甕、羽釜、足付羽釜、青磁碗などである。

ＳＫ 11（第４図・第８図）

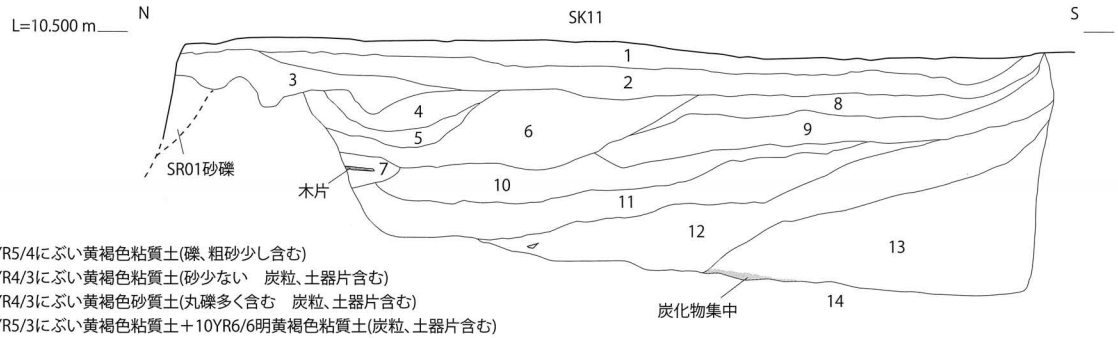
調査区中央西寄り第２工区と第３工区にまたがる位置で検出した。東側の１／４ほどを現代の撹乱により乱されている。平面形は隅丸長方形を呈し、南北約 5.5 m、東西約 4.0 mを測る。北端部の一部がＮＲ 01 と重複しており、その部分付近の掘り込みは浅い。南側が最も深く、検出面より 1.6 mである。土坑の壁面は直角に近く掘り込まれており、底面も水平に近い。南部の底が一部さらに深く掘られているのは、粘土の良好な部分を選んで掘り進んだためではないかと想像される。埋土は地山に近い土のブロックが多く含まれており、土坑掘削後ある程度短期間のうちに埋められたことがわかる。また、埋土最下部の一部に炭化物が集中する部分があり、火を受けた木片や貝殻の小破片などが含まれていた。土坑を埋戻す際に共に入れられた廃棄物とみられる。出土遺物は古代の須恵器壺、中世の土師器皿、羽釜、瓦器椀、皿、瓦質土器羽釜、足付羽釜、擂鉢、備前焼擂鉢、白磁皿、青磁碗、近世の肥前磁器染付などである。近世に属する。

ＳＫ 12（第４図・第８図）

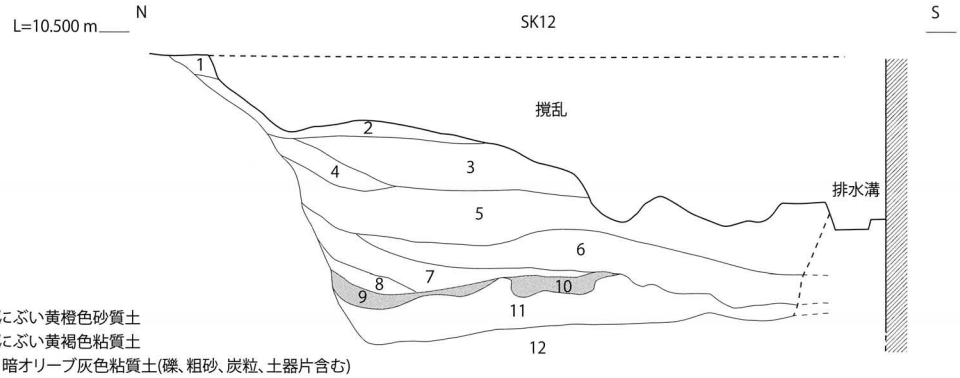
調査区中央南寄り第２工区と第３工区にまたがる位置で検出した。東部を１／２ほど現代の撹乱で乱されており、埋土の上部半分はその撹乱土であった。さらに南西部一部は調査区外となる。平面形は隅丸長方形と推測され、南北約 6.8 m、東西約 4.0 mとみられる。土坑底部は中央、南部の一部が特に深く掘られている。最深部は検出面より 1.9 mである。出土遺物は古墳時代の須恵器蓋坏、中世の土師器皿、瓦質土器甕、白磁碗、青磁碗、近世以降の丸瓦、桟瓦などである。こちらも底付近に多くの炭化物、廃棄物を含んだ層があり、瓦、ガラス棒製品、土製品、貝殻片、布切れ、モミ殻、木材片、自然木など多くの遺物が含まれていた。ＳＫ 11 と同様、土坑を埋戻す際に作業などで出たゴミなどを一緒に捨てたとみられる。近世の遺物も多



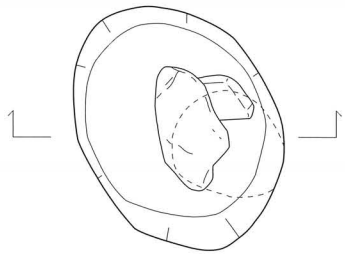
第７図　第１遺構面　遺構断面図①（１／50）

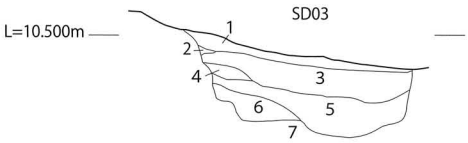


1 10YR5/4にぶい黄褐色粘質土(礫、粗砂少し含む)
2 10YR4/3にぶい黄褐色粘質土(砂少ない　炭粒、土器片含む)
3 10YR4/3にぶい黄褐色砂質土(丸礫多く含む　炭粒、土器片含む)
4 10YR5/3にぶい黄褐色粘質土＋10YR6/6明黄褐色粘質土(炭粒、土器片含む)
5 10YR4/3にぶい黄褐色粘質土(粗砂含む　鉄分沈着する)
6 10YR4/2灰黄褐色粘質土(礫少し含む　粗砂、炭粒、土器片含む)
7 10YR4/2灰黄褐色粘質土(粘性強い　6より砂礫少ない)
8 10YR5/1褐灰色粘質土(丸礫含む)
9 10YR4/2灰黄褐色粘質土(10YR4/4褐色粘質土がブロック状に混じる)
10 5BG4/1暗青灰色粘質土＋2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘質土(炭粒、土器片含む)
11 5BG4/1暗青灰色粘質土＋2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘質土(10より砂礫多い)
12 2.5Y5/4黄褐色粘質土(粘性強い)+2.5Y4/1黄灰色粘質土(粗砂混じる)
13 7.5Y4/1灰色粘質土(粘性強い　丸礫、粗砂含む　5G4/1暗緑灰色粘質シルトがブロック状に細かく混じり合う　最下位に一部炭片が多く集まる部分あり)
14 10YR5/4にぶい黄褐色粘質シルト(地山)

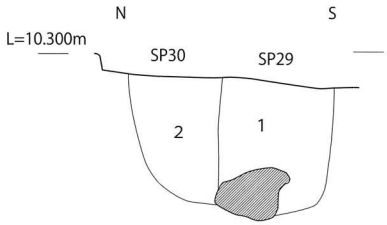


1 10YR6/3にぶい黄橙色砂質土
2 10YR5/3にぶい黄褐色粘質土
3 2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘質土(礫、粗砂、炭粒、土器片含む)
4 5GY4/1暗オリーブ灰色粘質シルト
5 2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘質土(粗砂、礫が3より多い)
6 7.5GY5/1緑灰色粘質土＋2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘質土(礫、粗砂、炭粒、土器片含む)
7 7.5GY4/1暗緑灰色粘質シルト＋2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘質土(6より砂礫少ない)
8 7.5GY4/1暗緑灰色粘質シルト＋2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘質土少し混じる
9 2.5GY2/1黒色粘質土(炭、炭化物、貝殻片など多く含む)
10 9と11の混じり
11 10GY4/1暗緑灰色粘土(2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘質シルトがマーブル状もしくは踏み込まれたように混じる　地山より粘性強い　土器細片、炭化物少し含む)
12 10YR5/4にぶい黄褐色粘質シルト(地山)





1 10YR4/4褐色細砂(丸礫含む)
2 10YR4/4褐色細砂(礫含まない　若干10YR4/4褐色粘質土含む)
3 10YR5/3にぶい黄褐色砂礫(粗砂と丸礫含む)
4 10YR4/3にぶい黄褐色粗砂(10YR4/4褐色粘質土ブロック少し含む)
5 10YR5/3にぶい黄褐色砂礫+泥(4より礫大きい　粗砂含む)
6 10YR5/4にぶい黄褐色粗砂(丸礫含む)
7 10YR4/6褐色粘質土



1 10YR5/1褐灰色粘質土(黄褐色土含む)
2 10YR5/4にぶい黄褐色粘質土

0　2m　　0　1m

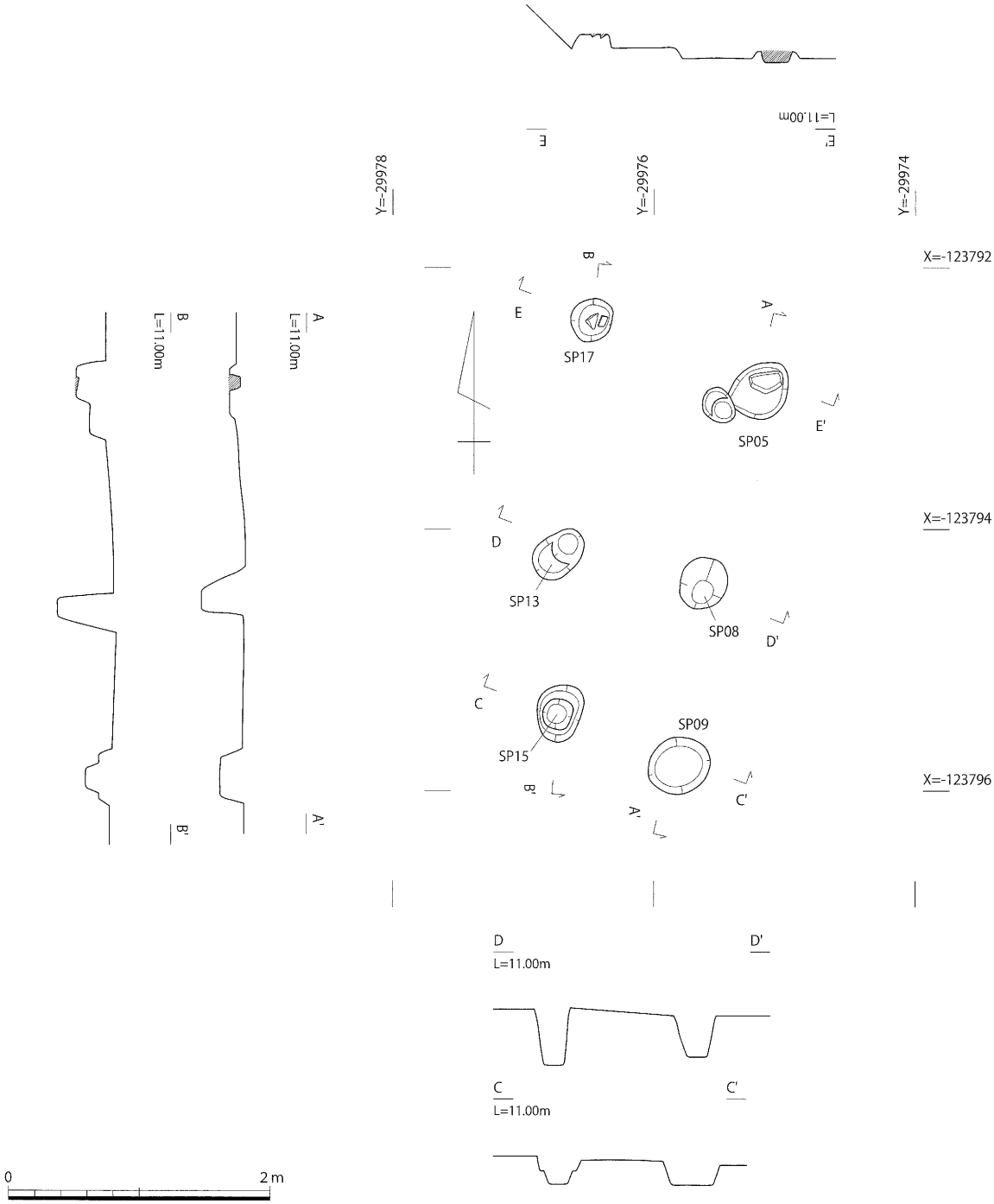
第８図　第１遺構面　遺構断面図②・柱穴遺構図（１／50・１／20）

くみられるが、ガラス製品があることや、瓦の作りなどをみるとこの土坑は、近世より下り、明治時代以降に属するものと捉えるのが妥当であろう。

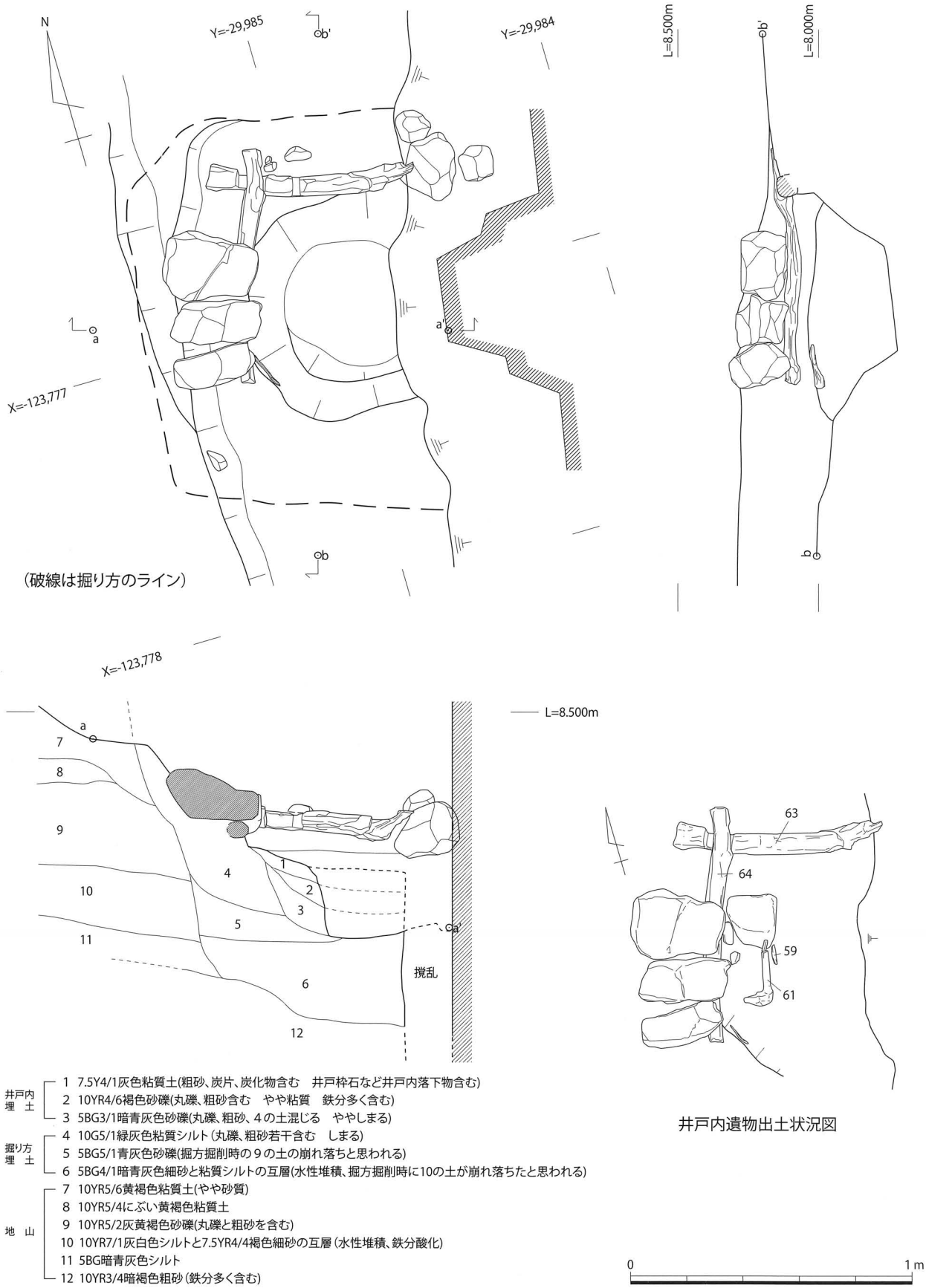
掘立柱建物

ＳＢ 01（第９図）

ＳＰ 05・ＳＰ 08・ＳＰ 09・ＳＰ 13・ＳＰ 15・ＳＰ 17 で構成される。調査区南東端で検出した。柱間約 1.4 ｍの建物跡である。全体の規模は、東部が調査区外に続くため不明だが、２間×１



第９図　ＳＢ 01 実測図（１／50）



井戸内遺物出土状況図

井戸内埋土
1 7.5Y4/1灰色粘質土(粗砂、炭片、炭化物含む　井戸枠石など井戸内落下物含む)
2 10YR4/6褐色砂礫(丸礫、粗砂含む　やや粘質　鉄分多く含む)
3 5BG3/1暗青灰色砂礫(丸礫、粗砂、4の土混じる　ややしまる)

掘り方埋土
4 10G5/1緑灰色粘質シルト(丸礫、粗砂若干含む　しまる)
5 5BG5/1青灰色砂礫(掘方掘削時の9の土の崩れ落ちと思われる)
6 5BG4/1暗青灰色細砂と粘質シルトの互層(水性堆積、掘方掘削時に10の土が崩れ落ちたと思われる)

地山
7 10YR5/6黄褐色粘質土(やや砂質)
8 10YR5/4にぶい黄褐色粘質土
9 10YR5/2灰黄褐色砂礫(丸礫と粗砂を含む)
10 10YR7/1灰白色シルトと7.5YR4/4褐色細砂の互層(水性堆積、鉄分酸化)
11 5BG暗青灰色シルト
12 10YR3/4暗褐色粗砂(鉄分多く含む)

0　1m

第10図　ＳＥ01実測図（1／20）

間以上の建物とみられる。また、ＳＰ 05、ＳＰ 17 では根石が確認できた。出土遺物は土師器皿、瓦器椀、皿などである。室町時代に属すると考えられる。

柱穴

ＳＰ 29・ＳＰ 30（第８図）

調査区中央で検出した。当初は２つのピットと捉えていたが、ＳＰ 29 が柱痕でＳＰ 30 が掘り方である。底には根石を確認した。周囲が撹乱で乱されている為、建物になるかは不明である。出土遺物は瓦器椀、皿、中世須恵器の小片である。

その他柱穴とみられるピットを数基検出したが、現代の撹乱を免れた部分的な検出状況だったため、建物等を想定できるものはなかった。

流路・溝

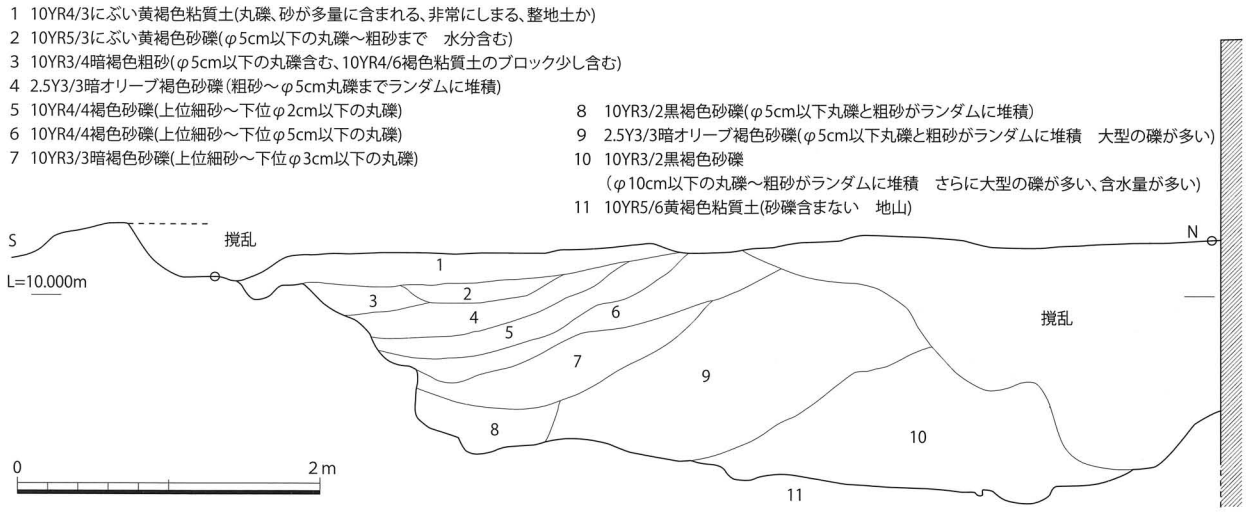
ＳＤ 03（第４図・第８図）

調査区西部端を北西～南東方向に走る流路である。検出長 8.0m、幅 1.2m ～ 1.5m、深さ約 0.5m を測る。埋土はほぼ砂礫で占められており、断面も一部はＶ字状に深く切り込まれた状況もみられることなどから、洪水などで一気に流れ埋没した流路の残骸と判断できる。出土遺物は中世の土師器皿、瓦器椀、瓦質土器である。

井戸

ＳＥ 01（第 10 図）

自然流路（ＮＲ 01）内の第１期調査区と第２期調査区の境付近で検出した。自然流路を掘削中、流路底付近で石組、木枠組が見つかったが、工事地区境界だったため、井戸上部や東部は以前の工事作業で壊されていた。本来は自然流路が砂礫で埋没した後に造られた井戸である。検出したのは井戸の最下位の石組み３石とその下に組まれた井桁材である。本来最下部に組まれた井桁に合わせて方形に石組みを構築していったものであろう。残存部分の井戸の規模は、井戸



第 11 図　ＮＲ 01 断面図（１／50）

枠内法で南北残存0.8ｍ、東西残存約0.5ｍを測る。本来は一辺１ｍほどの井戸であろう。深さは検出面より約0.5ｍである。井戸内からは、土師器皿、手斧の柄、下駄、木製櫛などが出土した。

（２）第２遺構面

自然流路

ＮＲ01（第５図・第11図）

調査区北部で検出した。調査区の約１／３を占めるこの自然河川は、東西方向に流れ、川幅は調査区外に続くため不明であるが、深さが２ｍ程あるためかなり広い川幅が想像できる。堆積は拳大の礫がほとんどで、遺物も含まないことから一気に氾濫で埋まった状態と考えられる。流路の肩の勾配もかなり急で第２遺構面を約1.3m削りとっており、勢いのある水流に削られた状況であることがわかる。この氾濫の時期は、流路からの遺物がほとんどないため特定できないが、第１面の所属時期の上限である中世後半以前であろうと考えている。

落ち込み状遺構

ＳＸ01（第５図・第12図）

調査区中央を北西～南東方向に走る谷状の落ち込みである。北部はＮＲ01に切られる。検出長約17.0ｍ、幅約2.2～5.5ｍ、深さ約0.2～0.6ｍを測る。自然地形とみられ、この落ち込みの上層及び周辺から、サヌカイト製の打製石鏃や、縄文時代後期の土器が出土した。

ＳＸ04（第５図・第12図）

調査区西部で検出した北西～南東方向に長い溝状の落ち込みである。北部、南部ともに撹乱で乱されている。検出長約7.0ｍ、幅約1.3～2.5ｍ、深さ約0.3ｍを測る。ＳＸ01と同様の自然地形の窪み地とみられる。縄文土器の可能性がある土器片が少量出土したが、非常に細片のため詳細は不明である。

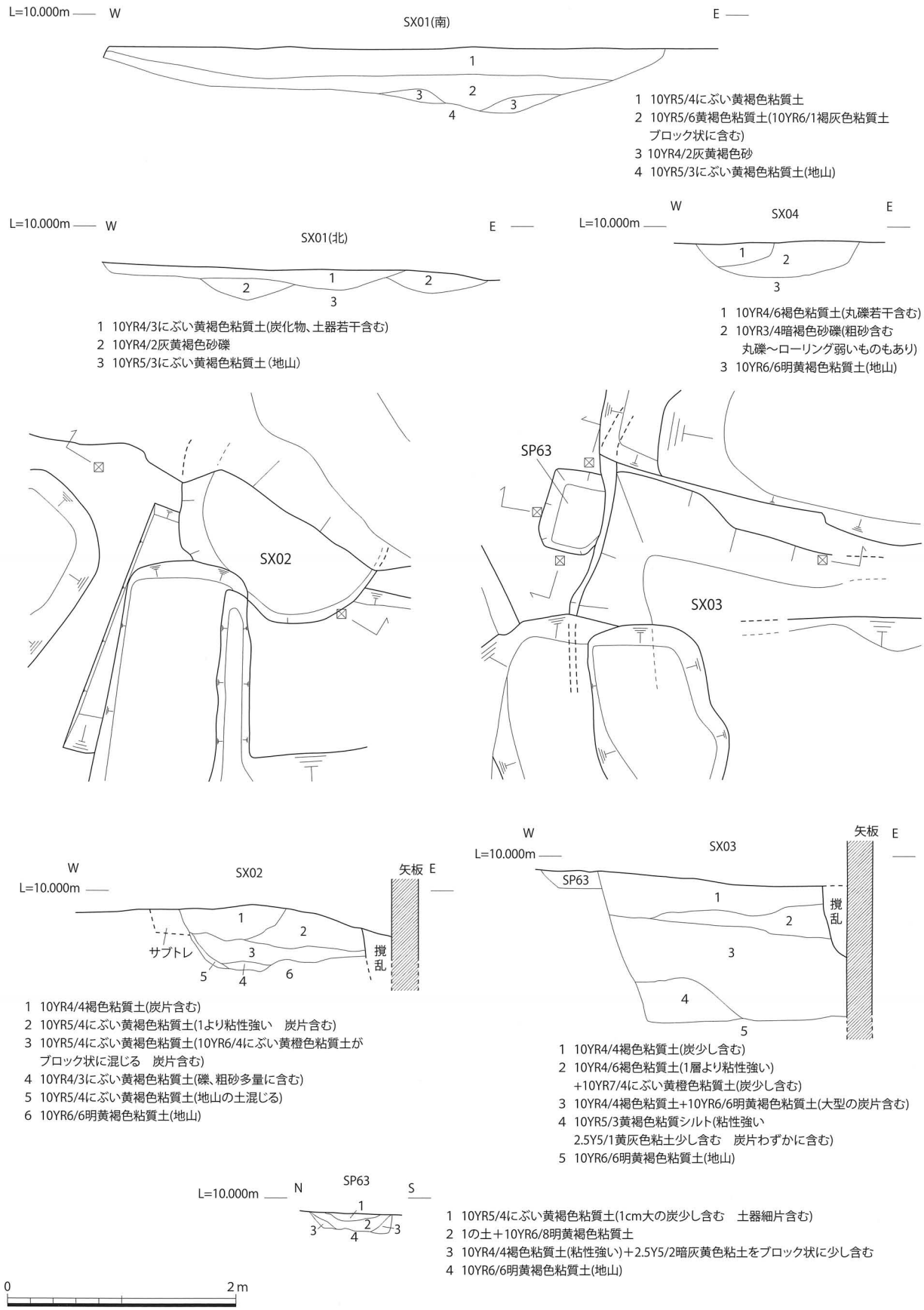
性格不明遺構

ＳＸ02（第12図）

北側をＮＲ01、南側を第１面のＳＫ11に切られる土坑状の遺構である。南北残存約0.9ｍ、東西残存1.6ｍ、深さ約0.6ｍを測る。埋土に炭の破片を多く含む。遺物は出土しなかった。

ＳＸ03（第12図）

南側の大半を第１面のＳＫ12に切られている土坑状の遺構である。平面形は方形とみられる。南北残存1.0ｍ、東西約2.2ｍ、深さ約1.3ｍを測る。埋土は炭片を含む粘質土である。遺物は出土しなかったが、遺構の形状と、掘り込みの壁が切り立っていることなどから、粘土採掘土坑の可能性がある。（若林・大西）



第12図　第2遺構面　遺構平面・断面図（1／50）

第３節　出土遺物

（第１遺構面）

粘土採掘土坑出土遺物

中世の遺物（第 13 図・図版 11、12）

（１）～（20）は土師器皿である。（１）～（８）は口径７cm 前後の小型のもの、（９）～（16）は口径９cm ～ 12cm 前後の中型のもの、（17）～（20）は口径 15cm 以上の大型のものである。いずれも外面下半を指押さえ、口縁部をヨコナデするもので、底部から口縁は直線的に開き、口縁はヨコナデにより外反するものが多い。内面にハケ状のナデ上げのみられるものがある。（13）～（16）は器高が 2.5cm ～ 3.5cm ほどで、やや深手である。いずれも 15 世紀～ 16 世紀に属すると考える。（１）～（５）・（12）・（13）・（15）～（17）・（19）・（20）はＳＫ 11、（６）はＳＫ 10、（７）はＳＫ 12、（８）・（11）・（14）はＳＫ 04、（９）・（10）・（18）はＳＫ 02 より出土した。

（21）～（24）は瓦器椀である。体部から口縁部まで直線的に開くもので、口縁端部内面の沈線が消失、高台も（21）は若干残存しているがほぼ消失する。内面のミガキもかなり省略された樟葉型衰退期のものである。13 世紀末様～ 14 世紀前半に属する。（21）はＳＫ 02、（22）・（23）はＳＫ 10、（24）はＳＫ 11 より出土した。

（25）は瓦器皿である。口縁はヨコナデにより外反し、端部はやや尖り気味に丸い。瓦器椀と同様の時期におさまるであろう。ＳＫ 11 より出土した。

（26）は土師器羽釜である。幅の短い鍔を持ち、口縁部は短く内傾し、端部はやや丸い。15 世紀代である。ＳＫ 11 より出土した。

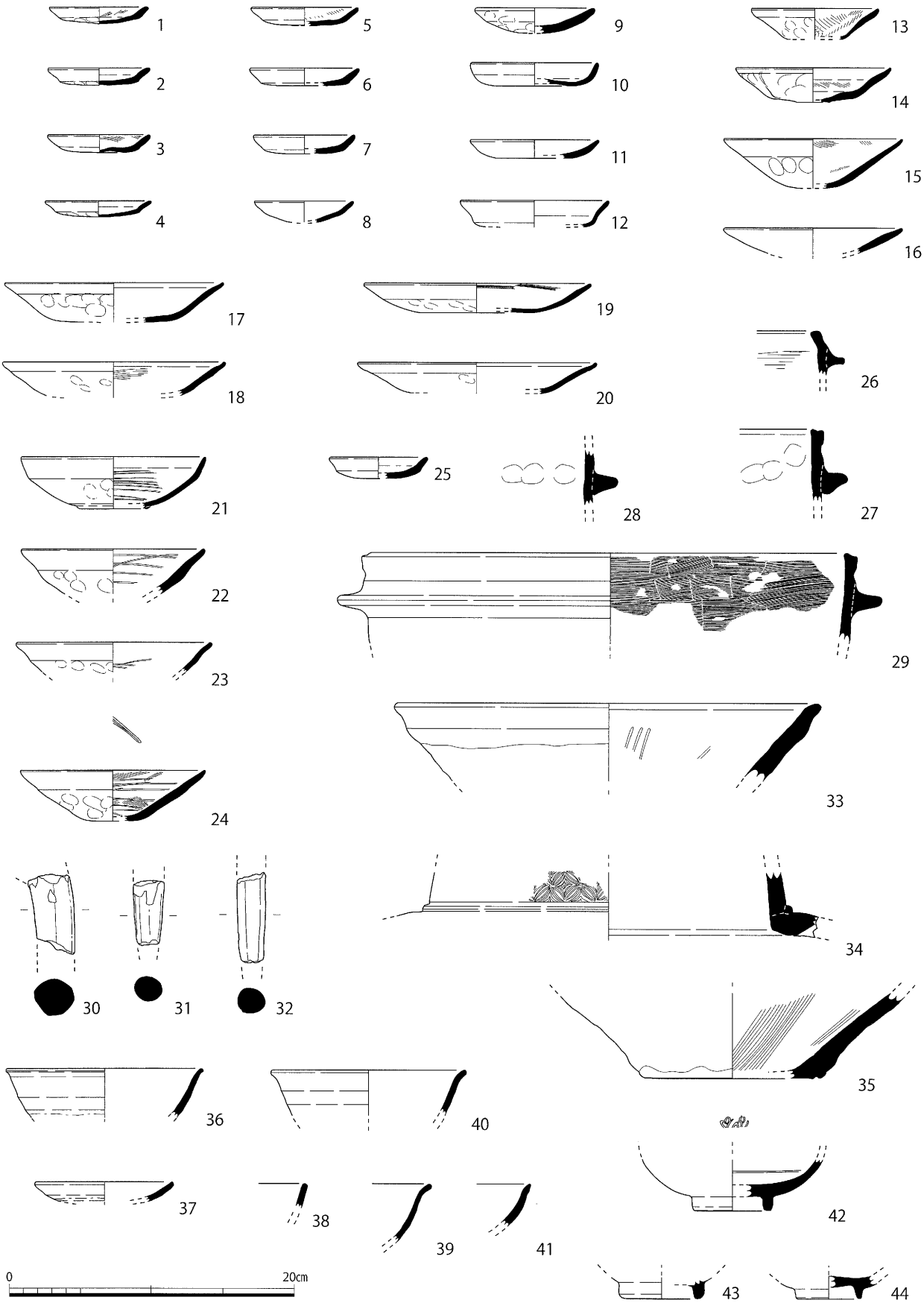
（27）～（29）は瓦質土器羽釜である。幅２cm 前後の短い鍔を持ち、口縁は体部からほぼ直線的に直方もしくはやや外方に開く。端部は四角く、上端に面を持つ。口縁外面はヨコナデによる段が強く残り、内面上位はハケ調整を施す。15 世紀代とみられる。いずれもＳＫ 11 より出土した。

（30）～（32）は瓦質土器足付羽釜の脚部である。いずれも中間部分の破片である。外面は面取りが行われた後ナデ調整されている。（30）はＳＫ 10、（31）・（32）はＳＫ 11 より出土した。

（33）は瓦質土器擂鉢である。体部から口縁は直線的に開き、端部はナデによりやや外反気味で、口縁内側に狭い面を持つ。隙間の広い擂り目が３条みられる。ＳＫ 11 より出土した。

（34）は瓦質土器の風炉である。口縁部直下の文様帯部分から体部の破片である。花菱文をスタンプした文様帯の下部に突帯を１条めぐらせる。体部上位に窓の切り込みの痕跡が残る。15 世紀以降～近世の幅を持たせたい。ＳＫ 01 より出土した。

（35）は備前焼擂鉢である。７本単位の擂り目を施す。15 ～ 16 世紀代であろう。ＳＫ 11 よ



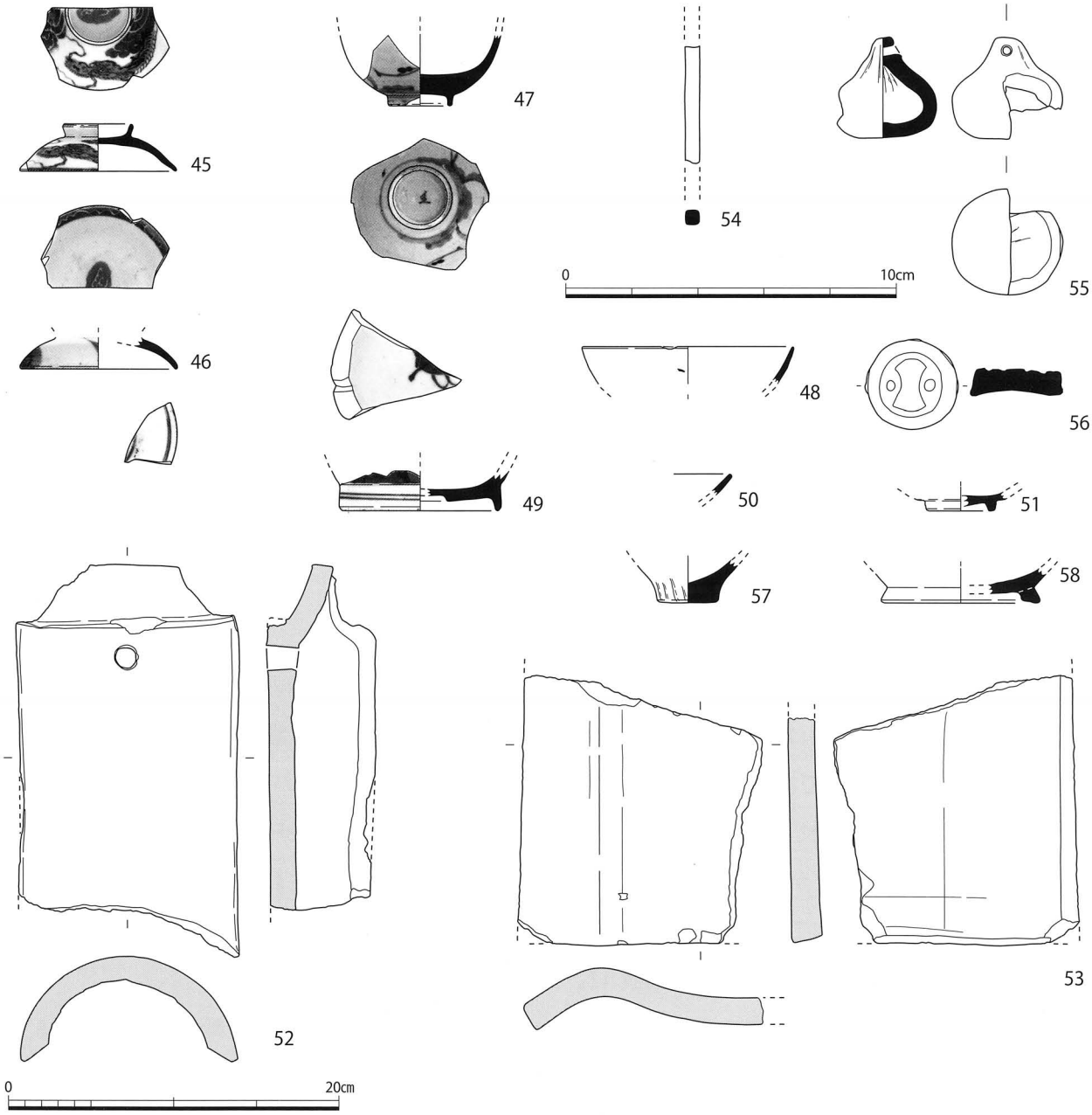
第13図　粘土採掘土坑出土遺物（中世）（1／4）

り出土した。

(36) は白磁碗である。体部から口縁はやや内湾して開く。口縁はやや外反し、端部は丸く収める。釉は不透明の白濁したものである。12 世紀後半～ 14 世紀初頭か。ＳＫ 12 より出土した。

(37) は白磁皿である。体部から口縁はやや直線的に開き、端部は面を持つ。12 世紀代とみられる。ＳＫ 11 より出土した。

(38) ～ (44) は青磁碗である。(38) は口縁が直線的に開き端部は丸く収める。(39)・(40) は体部から口縁が内湾して開き、口縁は外反し端部は丸く収める。器壁は薄い。(41) は体部から口縁がやや内湾して開き、口縁はやや外反し端部は尖り気味となる。器壁はやや厚い。(42)



第 14 図　粘土採掘土坑出土遺物（近世以降・その他）（１／４・１／２）

は底部で、見込みにヘラ描きによる圏線と劃花文を陰刻する。(43)・(44) は底部高台部である。いずれも龍泉窯系である。14 世紀～ 15 世紀代であろう。(38)・(43) はＳＫ 12、(39)・(44) はＳＫ 10、(39) ～ (42) はＳＫ 11 より出土した。

近世以降の遺物（第 14 図・図版 13）

(45) ～ (49) は肥前磁器染付である。(45) は蓋で、外面に雲と龍を描き、摘み内と内面見込みに雲状文を描く。(46) は蓋で、外面に草花文、内面に２条の圏線を描く。(47) は碗で、外面に草花文、高台内に文字文を描く。(48) は碗で、染付の絵柄は不明である。(49) は皿で、外面に草花文、見込みにも木葉状の絵柄を描く。底部は蛇の目凹形高台である。いずれも 18 世紀末～ 19 世紀代に属する。(45) ～ (47)・(49) はＳＫ 02、(48) はＳＫ 11 より出土した。

(50)・(51) は磁器皿である。白色の胎土に透明釉を施す。ＳＫ 11 より出土した。

(52) は丸瓦である。玉縁方向が残存し、釘穴が１つ穿たれる。凹面にコビキＢの技法がみられる。ＳＫ 12 より出土した。(53) は桟瓦である。凸部分の破片である。ＳＫ 12 より出土した。

(54) は棒状ガラス製品である。断面は角の丸い四角形で、破片のため全長は不明である。濃い青色を呈する。ＳＫ 12 より出土した。

(55) は土鈴である。ＳＫ 12 より出土した。(56) は泥面子である。型押し文を施す。ＳＫ 10 より出土した。

近世の遺物はおおむね 18 世紀末～ 19 世紀代のものとみられ、江戸時代後期～明治時代初頭に属するものと捉えられる。

その他の時代では、弥生時代後期の壺底部 (57)、奈良時代の須恵器壺底部 (58) が出土している。下層からの混入遺物であろう。(57) はＳＫ 01、(58) はＳＫ 11 より出土した。

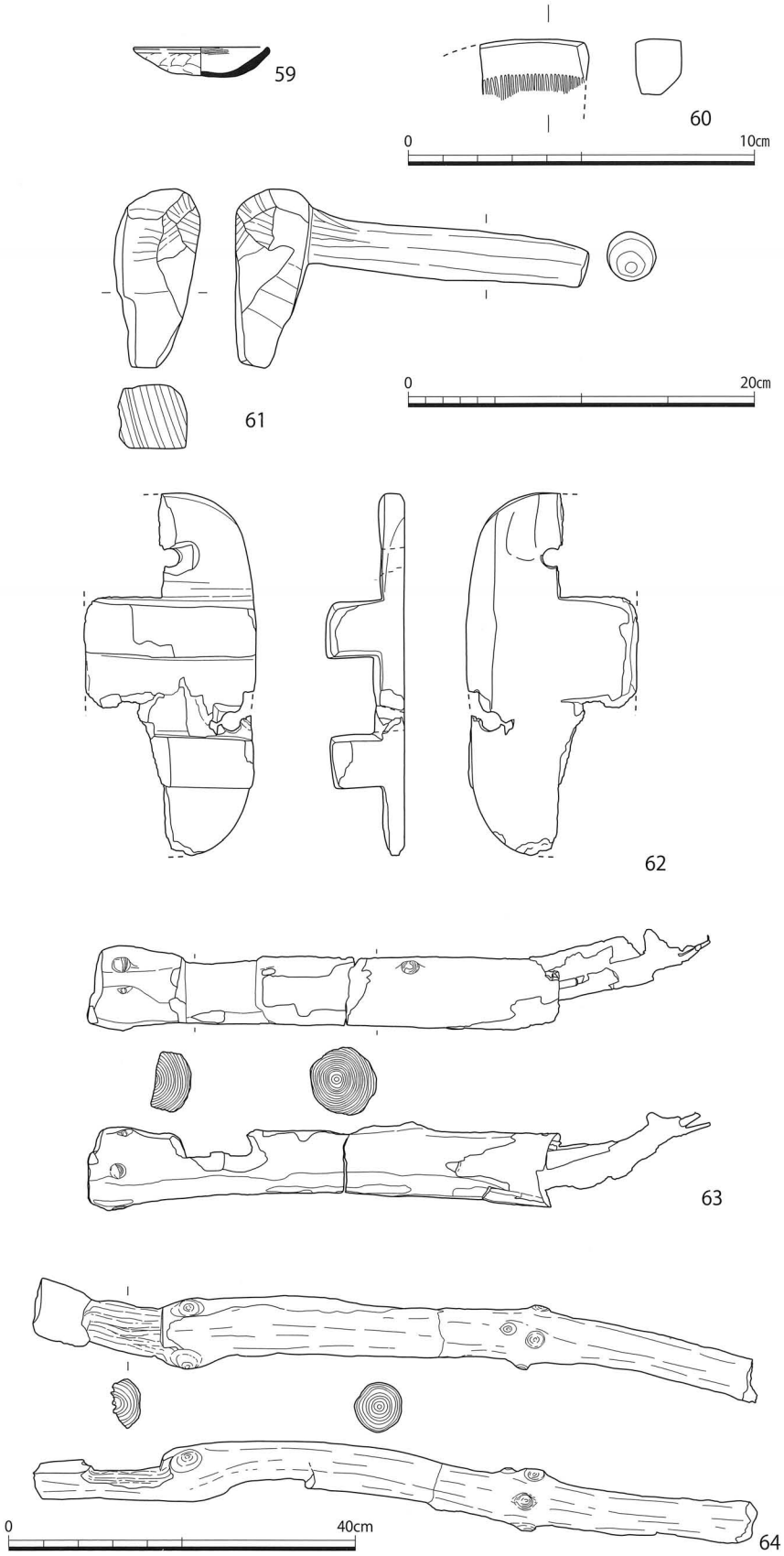
井戸出土遺物

ＳＥ 01 出土遺物（第 15 図・図版 13、14）

(59) は完形の土師器皿である。手づくね成形とみられ、口縁端部のみに非常に狭い幅のヨコナデを行っている。内面はハケ状の道具で調整を行っており、外面も底部に軽く一方向の調整を行う。(60) は木製櫛である。横型の櫛であるが、櫛の歯の根元付近の破片で残存状況は悪い。(61) は手斧の柄とみられる。斧の刃を装着する頭部は細かい成形痕がみられる。(62) は木製下駄である。１／３ほどが欠損している。(63)・(64) は井桁状に組まれた、井戸枠の部材である。木の枝を部分的に加工したものである。

その他遺構等出土遺物（第 16 図・図版 11、12、13）

(65) ～ (68) は土師器皿である。口径は６cm ～ 10cm 前後で、前掲の土師器皿と同様 15 世紀～ 16 世紀に属するものと考えられる。(65) はＳＫ 05、(66) はＳＰ 05、(67) はＳＫ 08、(68) は遺構面精査中に出土した。



第15図　ＳＥ01出土遺物（１／２・１／４・１／８）

(69)・(70) は土師器羽釜である。(69) は幅の短い鍔部に口縁が短く内傾して伸び、端部上面に面を持つ。(70) は幅の短い鍔部に口縁が直方に伸び、端部はやや尖る。口縁外面はヨコナデによる段を有する。内面はハケ調整を施す。15 世紀～ 16 世紀前半であろう。(69) はＳＫ07、(70) は遺構面精査中に出土した。

(71) は瓦質土器羽釜である。断面三角形の短い鍔部に口縁が外方に直線的に開き、端部は四角く上端に面を持つ。15 世紀後半～ 16 世紀前半であろう。

(72) は肥前陶器椀である。体部は内湾して開き、口縁は外反し端部は丸く収める。内外面に灰釉を施す。16 世紀後半～ 17 世紀前半とみられる。

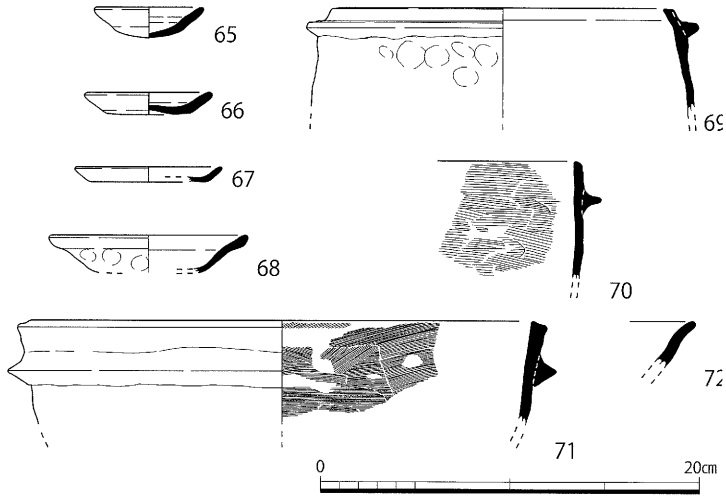
(第２遺構面)

包含層他出土遺物 (第 17 図・図版 14)

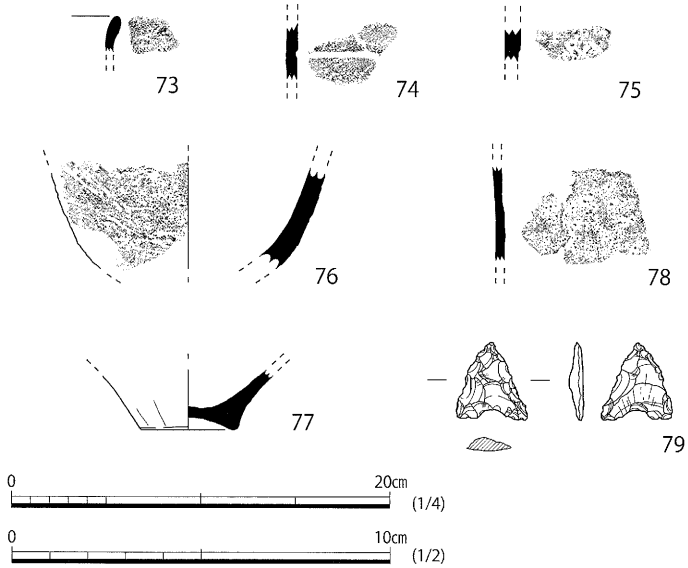
(73) ～ (78) は縄文土器深鉢である。(73) は口縁部で、頸部から外反し、口縁は外側に肥厚する。端部はやや尖り気味に丸い。(74) は体部で、外面に横方向の太い沈線を施す。磨消縄文の可能性がある。(75) は体部で、外面に縄文が若干残存する。(76) は底部付近の体部で、外面に横方向、斜め方向の条痕を施す。(77) は底部である。底部外面は丸石を押し当てたような凹底を呈している。外面に板状の工具かと思われる調整痕が若干残るが、全体に磨滅が著しい。(78) は体部である。こちらも磨滅が著しく調整痕などははっきりしない。第２面包含層(２層)より出土。いずれも縄文時代後期に属する。

(79) は打製石器の石鏃である。サヌカイト製で、凹基無茎式鏃である。

(大西)



第 16 図　第１遺構面その他出土遺物（１／４）



第 17 図　第２遺構面出土遺物（１／４・１／２）

第４章　まとめ

今回の広瀬遺跡の調査は、旧構造物の建設などに伴う工事作業で多くの部分が乱されており、遺構の残存状況は悪かったと言わざるを得ない。しかし撹乱を免れた部分の調査によりいくつかの注目すべき成果が得られたので、これらを整理しまとめにかえたい。

第１節　第１遺構面の粘土採掘土坑について

第１遺構面の調査では、粘土採掘土坑と考えられる大型の土坑が多数検出された。これらの土坑は、調査区の北東から南西に向かって２列に並ぶように掘削されている。当調査区で確実に粘土採掘土坑と判断できたものは７基である。土坑の平面形状は隅丸方形（長方形）もしくは楕円形で、規模は小さいもので４ｍ×３ｍ前後、大きいもので７ｍ×５ｍ前後である。深さは１ｍ弱～1.5ｍ前後である。各土坑の規模に大きな隔たりはなく、平均的には一辺５ｍ前後の隅丸方形で深さは1.5ｍ前後のものと捉えられ、規模が似通っているといえる。

これらの土坑を粘土採掘土坑と考える根拠としては、規模の似通った土坑が連続して掘られていること、調査区北部の自然流路（ＮＲ 01）の砂礫堆積の範囲には掘られておらず、それより南の、礫のない粘性の強い地山が存在する範囲に掘られていること、土坑の掘込みの壁の角度が急で、中には直角に近いものもあること、埋戻しの土には周囲の地山のブロック土が多く混入しており、期間を置かずに埋戻されていると観察されること、埋土に含まれている遺物は破片が多く、層位の上下で遺物の時期に違いがなくランダムな傾向で含まれていることなどが挙げられる。

中世から近世の粘土採掘土坑は、大阪府内では堺市、貝塚市、泉佐野市、泉南市、南河内郡美原町（現堺市）などで報告されている。特に貝塚市内検出の近世粘土採掘土坑については、前川浩一氏が論考を試みている。(1) また、遺跡における中世から近世の土取り行為については、五十川伸矢氏の研究がある。(2)

五十川氏の研究によると、土取り遺構は中世では不定形な形態であるが、近世には方形の形態に変化し、土坑の中である一定の単位の掘り込みで分割して採掘しているものもあるとしている。その変化の原因について、中世においては地域の土器生産集団など土を必要とする者が為政者から権利を与えられたり、地権者に年貢を納めたりして主体的に採掘していた。しかし近世に入ると土が商品として売買されるようになり、土を取る専業者も登場してきた。そのため、土の採取量が算定しやすいような採掘方法が必要になったためであると論じている。さらに近世の土取り遺構は既存の耕作地の地割や畔、水路などを壊すことなく掘られている、としている。今回の広瀬遺跡の粘土採掘土坑をみると、土坑の残存状況により平面形の確定できないものもあるが、方形または方形と想定されるものが多く、土坑の壁も急角度に切り立つものが多い。それぞれ規模もほぼ似通っていて、五十川氏のいう近世の土取り遺構の特徴を備えているとい

えよう。

採掘された粘土の用途については、五十川氏が広く土の用途として、建物の壁土などに使う建築用土、道路の路面整備などに使う土木用土、陶磁器・瓦などに使う焼物土、その他鋳物用土、鍛冶用土、宗教用土を挙げている。前川氏は貝塚市内で検出された近世の粘土採掘土坑について、土坑の埋戻し土に調査地点以外からの搬入土が含まれる点や、陶磁器や瓦が多く含まれている点、地域住民からの聞き取りなどから、建物の壁土等に使用した建築用土を得るための粘土採掘土坑であると結論付けている。農家で住居を改築する場合、建築用土として農地の床土以下を掘削し、その後に既存の住宅の解体残土や瓦を捨てるということである。広瀬遺跡の粘土採掘土坑の場合、埋戻し土が明らかに別の場所から運ばれた土と認識できるものはないと思われ、むしろ周囲と近い土に掘り込んだ地山土のブロックが混じったもので、採掘を行った穴を短期間で埋めていったように想像される。埋土に含まれる遺物についても、広瀬遺跡のものは遺物の量自体があまり多くなく、土坑掘削により混入した中世の遺物の方が、近世の遺物よりかえって多いくらいである。瓦も数点出土しているが、貝塚市の例のような解体残土や廃棄物を捨てたという状況とは異なっている。土坑の底付近に燃えた炭や遺物の集中する部分がみられる土坑もあるが、おそらく粘土採掘作業時や耕作地近辺で出た廃棄物等を、土坑を埋める際に捨てたものとみるのが妥当ではないかと考えられる。

採掘した粘土はどこで使われたか。その問題について前川氏は、貝塚市内の粘土採掘土坑が貝塚寺内町遺跡の近郊で発見されていること、粘土採掘土坑の出土遺物に中国からの輸入磁器「青花」が比較的多くみられることから、これらを入手できる力のある貝塚寺内町での建物建設にこれらの粘土が使われたとしている。堺市では、堺環濠都市の周辺で検出されており、中世～近世に発展を遂げた寺社や都市を消費地として、その近郊で粘土採掘が行われていたという関係性が見いだせる。広瀬遺跡についても、当時の広瀬村は京都と西国を結ぶ西国街道の通る交通要衝の地であり、山崎宿と共に中世以降経済的発展をみせ、現島本町域内の村では最も人口の多い中心的な村であった。宿場町として町並みもあり、村内には水無瀬神宮もあることから、建築用土の需要は高かったと思われる。また、天明２年（1782）～大正６年（1917）の間当地で製作された「桜井焼」の窯跡も近郊にあり、陶磁器や瓦用の粘土として使われた可能性もある。今回の調査区は狭かったため、この地域での粘土採掘の実態は部分的にしか掴めなかった。今後の調査で粘土採掘土坑の掘られている範囲や分布、集落遺構との関連性を明らかにしていくことが今後の課題と考える。

（１）前川浩一「付論　貝塚市内発見の近世粘土採掘土坑」1997『加治・神前・畠中遺跡発掘調

査概要』貝塚市埋蔵文化財調査報告　第42集
（2）五十川伸矢「第6章　土取りの歴史的変遷」1991『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅳ－京都大学病院構内遺跡の調査－』京都大学埋蔵文化財センター
（3）貝塚市教育委員会　1996『東遺跡発掘調査概要Ⅰ』貝塚市埋蔵文化財調査報告第37集
（4）財団法人大阪府文化財調査研究センター　1997『余部遺跡－大阪府美原住宅の団地建設工事に伴う発掘調査報告書』調査報告書第11集
（5）堺市教育委員会　1996『長曽根遺跡発掘調査概要報告－堺市長曽根土地区画整理事業に伴う発掘調査Ⅱ－』
（6）泉南市教育委員会　1995『岡田西・氏の松遺跡発掘調査報告書』泉南市文化財調査報告書第28集

第2節　第2遺構面の縄文土器について

第2遺構面は北部を自然流路によって削られており、遺構も明確なものは検出されなかったが、遺物包含層、遺構面上などから縄文時代の遺物が出土した。

縄文土器は遺構に伴ったものではなく破片数も19点と少ないが、口縁、底部など時期の把握できる部位が少量みられた。全てが粗製の深鉢とみられ、縄文後期に属するものである。

唯一残る口縁部は端部が肥厚し、口縁下に頸部を形成する後期前葉～中葉の特徴がみられる。体部外面に幅の広いはっきりと深い横方向の沈線を施すものは、磨消縄文の可能性があり、中津式を代表とする後期初頭にさかのぼるかもしれない。半球形の凹形を呈する底部は厚みがあり、後期の底部に多い形態である。島本町内で縄文時代の遺構・遺物を検出しているのは、当遺跡より南西、名神高速道路にかかる位置の越谷遺跡で、縄文時代の包含層と溝が検出され、後期前葉（北白川上層式1期～2期）の土器が多量に出土しているが、部分的なトレンチ確認調査だったため詳細な調査に至っていない。広瀬遺跡の従来の調査では古代以前の遺構・遺物は検出されていなかったので、今回の調査で縄文後期の遺構が存在する可能性を見いだせたのは大きな成果と考える。近年近畿地方でも縄文時代の遺構の調査件数が増加している。今後の当地でのさらなる成果を期待したい。（大西）

参考文献

島本町史編さん委員会編　1975『島本町史　本文編』
島本町教育委員会　1991『島本町埋蔵文化財調査報告書』第1集

島本町教育委員会　2006　『島本町埋蔵文化財調査報告書』第８集
島本町教育委員会　2007　『島本町埋蔵文化財調査報告書』第９集
島本町教育委員会　2007　『島本町埋蔵文化財調査報告書』第 10 集
島本町教育委員会　2008　『島本町埋蔵文化財調査報告書』第 11 集
島本町教育委員会　2009　『島本町埋蔵文化財調査報告書』第 12 集
島本町教育委員会　2009　『島本町埋蔵文化財調査報告書』第 13 集
島本町教育委員会　2010　『島本町埋蔵文化財調査報告書』第 14 集
島本町教育委員会　2010　『島本町埋蔵文化財調査報告書』第 15 集
島本町教育委員会　1990　『わが町島本　目で見る歴史』
名神高速道路内遺跡調査会　1996　『中央自動車道西宮線拡幅工事に伴う　水無瀬荘跡遺跡　発掘調査報告書』　名神高速道路内遺跡調査会調査報告書第１輯
名神高速道路内遺跡調査会　1997　『中央自動車道西宮線拡幅工事に伴う　越谷遺跡 他 発掘調査報告書　伝待宵小侍従墓・源吾山古墳群』　名神高速道路内遺跡調査会調査報告書第２輯
加藤晋平・小林達雄・藤本強編　1994　『縄文文化の研究４　縄文土器Ⅱ』雄山閣
九州近世陶磁学会編　2000　『九州陶磁の編年－九州近世陶磁学会 10 周年記念－』
小林達雄編　1999　『普及版・季刊考古学　縄文土器の編年と社会』雄山閣
小林達雄編　2008　『小林達雄先生古希記念企画　総覧　縄文土器』「総覧　縄文土器」刊行委員会
小森俊寛・上村憲章　1996　『京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究』京都市埋蔵文化財研究所紀要第 3 号
大宰府市教育委員会　2000　『大宰府条坊跡ＸＶ　－陶磁器分類編－』大宰府市の文化財第 49 集
中世土器研究会編　1995　『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社

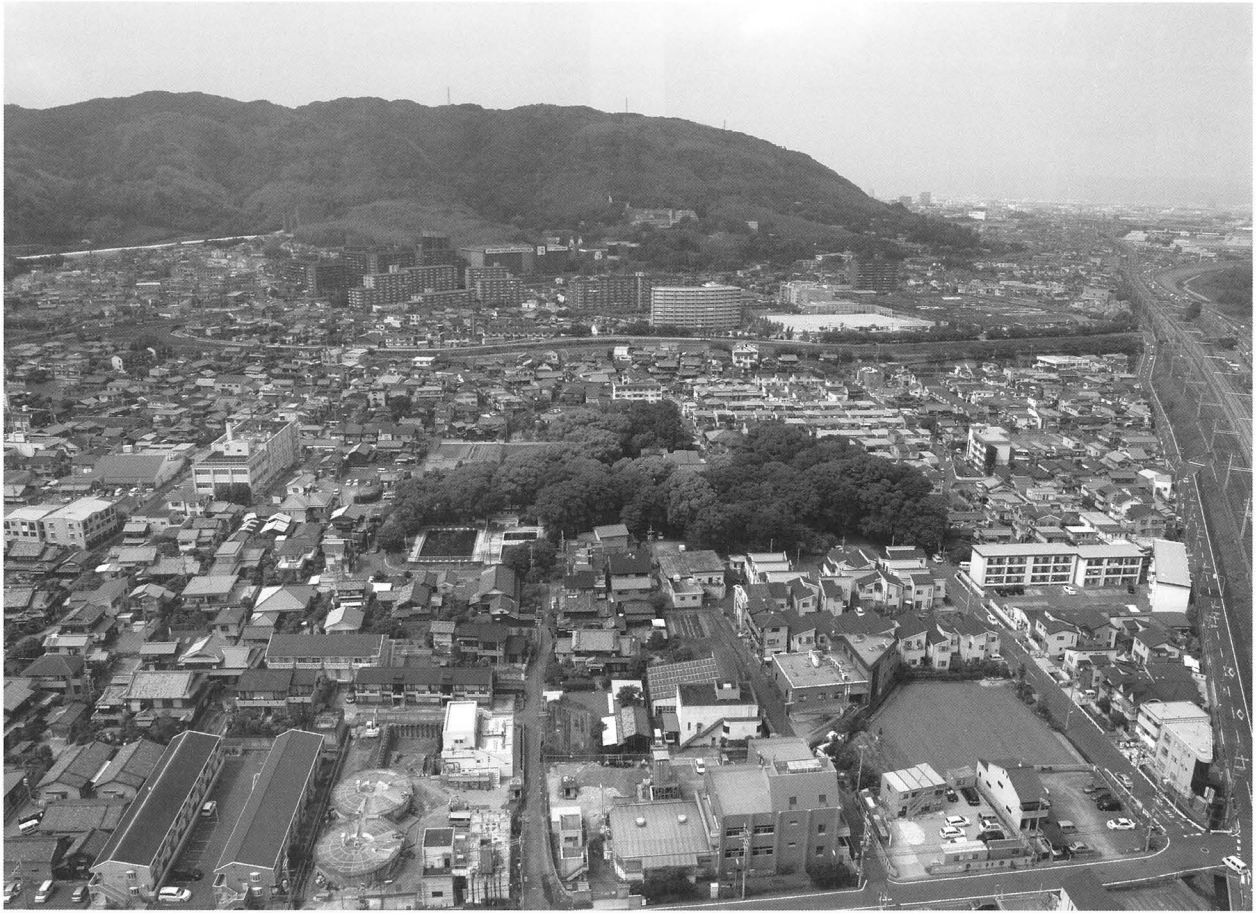
遺物番号	地区	遺構面	出土遺構・層位	種類	器形	法量(cm) ( )は残存			残存率	図版番号	備考
						器高(長)	口径(幅)	底径(厚)			
1	3工区	1面	SK11下層	土師器	皿	1.2	7.0	—	1/2	11上	内面ハケ目
2	3工区	1面	SK11上層	土師器	皿	1.25	7.2	—	1/4	11上	
3	2工区	1面	SK11埋土内	土師器	皿	1.25	7.25	—	5/6	11上	内面ハケ目
4	3工区	1面	SK11下層	土師器	皿	1.15	7.5	—	1/2	11上	
5	2工区	1面	SK11埋土内	土師器	皿	(1.3)	7.6	—	1/4	11上	内面ハケ目
6	2工区	1面	SK10埋土内	土師器	皿	(1.25)	7.8	—	1/4	11下	
7	2工区	1面	SK12埋土内	土師器	皿	(1.35)	7.2	—	1/6	11下	
8	1工区	1面	SK04埋土内	土師器	皿	(1.5)	7.0	—	1/6	11下	
9	1工区	1面	SK02埋土内	土師器	皿	(1.8)	8.4	—	1/6	11下	
10	1工区	1面	SK02埋土内	土師器	皿	(1.65)	9.0	—	1/8	11下	
11	1工区	1面	SK04埋土内	土師器	皿	(1.3)	9.0	—	1/9	11下	
12	3工区	1面	SK11上層	土師器	皿	(1.85)	10.4	—	1/4	11上	
13	3工区	1面	SK11下層	土師器	皿	(2.2)	9.0	—	1/6	11上	内面ハケ目
14	1工区	1面	SK04断面	土師器	皿	(2.45)	11.0	—	1/3	11下	内面ハケ目
15	2工区	1面	SK11埋土内	土師器	皿	(3.5)	12.6	—	1/4	11上	内面ハケ目
16	3工区	1面	SK11上層	土師器	皿	(1.8)	12.6	—	1/9	11上	
17	2工区	1面	SK11埋土内	土師器	皿	(2.8)	15.2	—	1/4	11上	
18	1工区	1面	SK02埋土内	土師器	皿	(2.4)	15.8	—	1/10	11下	内面ハケ目
19	3工区	1面	SK11下層	土師器	皿	(2.1)	16.0	—	1/7	11上	内面ハケ目
20	3工区	1面	SK11最下層(下段)	土師器	皿	(2.15)	16.8	—	1/8	11上	
21	1工区	1面	SK02埋土内	瓦器	椀	(3.7)	13.0	—	1/10	12上	高台有り
22	2工区	1面	SK10埋土内	瓦器	椀	(3.2)	13.0	—	1/6	12上	
23	2工区	1面	SK10埋土内	瓦器	椀	(2.15)	14.0	—	1/6	12上	
24	2工区	1面	SK11埋土内	瓦器	椀	(3.6)	13.0	—	1/3	12上	高台無し
25	2工区	1面	SK11埋土内	瓦器	皿	(1.5)	7.0	—	1/8	12上	
26	3工区	1面	SK11下層	土師器	羽釜	(3.15)	—	—	口縁部小破片	11下	内面ハケ調整
27	3工区	1面	SK11下層	土師器	羽釜	(5.15)	—	—	口縁部小破片	11下	
28	3工区	1面	SK11上層	瓦器	羽釜	(3.9)	—	—	鍔部破片	12上	
29	1工区・3工区	1面	褐色粘質土層 10YR4/4、SK11下層	瓦器	羽釜	(6.45)	34.9	—	1/5	12上	内面ハケ調整
30	2工区	1面	SK10埋土内	瓦器	足付羽釜	(5.7)	(3.3)	2.6	脚部破片	12上	
31	2工区	1面	SK11埋土内	瓦器	足付羽釜	(4.6)	(2.2)	1.75	脚部破片	12上	
32	3工区	1面	SK11最下層(下段)	瓦器	足付羽釜	6.4	2.0	1.8	脚部破片	12上	
33	2工区	1面	SK11埋土内	瓦質土器	擂鉢	(5.5)	30.0	—	1/10	12上	
34	1工区	1面	SK01埋土内	瓦質土器	風炉	(4.6)	—	—	1/9	12上	
35	3工区	1面	SK11上層	備前焼	擂鉢	(6.05)	—	13.2	1/6	13上	
36	2工区	1面	SK12埋土内	白磁	碗	(3.5)	14.0	—	1/10	12下	
37	3工区	1面	SK11上層	白磁	皿	(1.4)	9.8	—	1/9	12下	
38	3工区	1面	SK12下層	青磁	碗	(1.75)	—	—	口縁部小破片	12下	
39	2工区	1面	SK10埋土内	青磁	碗	(4.2)	—	—	口縁部小破片	12下	
40	2工区	1面	SK11埋土内	青磁	碗	(3.35)	14.0	—	1/10	12下	

付表1　出土遺物観察表

遺物番号	地区	遺構面	出土遺構・層位	種類	器形	法量(cm) ( )は残存			残存率	図版番号	備考
						器高(長)	口径(幅)	底径(厚)			
41	3工区	1面	SK11下層	青磁	碗	(3.0)	—	—	口縁部小破片	12下	
42	2工区	1面	SK11埋土内	青磁	碗	(3.65)	—	5.4	1/3	12下	
43	3工区	1面	SK12下層	青磁	碗	(1.5)	—	6.1	1/4	12下	
44	2工区	1面	SK10埋土内	青磁	碗	(1.65)	—	4.6	1/4	12下	
45	1工区	1面	SK02埋土内	磁器	蓋	2.85	9.5	—	1/4	13上	肥前染付
46	1工区	1面	SK02埋土内	磁器	蓋	(1.9)	9.5	—	1/8	13上	肥前染付
47	1工区	1面	SK02埋土内	磁器	碗	(4.25)	—	3.85	3/5	13上	肥前染付
48	2工区	1面	SK11埋土内	磁器	碗	(2.25)	12.8	—	1/10	13上	肥前染付
49	1工区	1面	SK02埋土内	磁器	皿	(2.4)	—	9.8	1/6	13上	肥前染付
50	3工区	1面	SK11下層	磁器	碗	(1.3)	—	—	口縁部小破片	13上	
51	3工区	1面	SK11上層	磁器	碗	(1.15)	—	4.2	1/4	13上	
52	3工区	1面	SK12最下層 炭より下	瓦	丸瓦	(23.75)	13.6	—	4/5	13下	
53	3工区	1面	SK12炭化層	瓦	桟瓦	(13.6)	(14.8)	1.6～1.85	1/4	13下	
54	3工区	1面	SK12下層(炭化層)	ガラス製品	ガラス棒	(3.55)	0.45	0.45	破片	13下	青色
55	3工区	1面	SK12上層	土製品	土鈴	3.05	3.2	—	3/4	13下	
56	2工区	1面	SK10埋土内	土製品	泥面子	2.7	2.8	0.85	完形	13下	
57	1工区	1面	SK01埋土内	弥生土器	壺	(2.6)	—	3.7	底部完存	11下	弥生後期
58	3工区	1面	SK11下層	須恵器	壺	(2.1)	—	9.6	1/6	11下	
59	3工区	1面	SE01井戸内	土師器	皿	1.75	7.9	—	ほぼ完形	13下	
60	3工区	1面	SE01上部	木製品	横櫛	(3.15)	(1.8)	1.35	1/5	14上	
61	3工区	1面	SE01井戸内	木製品	手斧柄	20.45	10.35	—	ほぼ完形	14上	
62	3工区	1面	SE01井戸内上部、矢板部破壊部分	木製品	下駄	(20.9)	9.95	4.55	2/3	14上	
63	3工区	1面	SE01井桁	木製品	井桁材	(71.95)	(9.85)	7.8	3/4	14上	
64	3工区	1面	SE01井桁	木製品	井桁材	83.65	10.45	11.8	5/6	14上	
65	1工区	1面	SK05埋土内	土師器	皿	1.6	5.8	—	1/4	11下	
66	1工区	1面	SP05埋土内	土師器	皿	1.2	6.8	—	1/3	11下	
67	1工区	1面	SK08埋土内	土師器	皿	(0.8)	7.8	—	1/8	11下	
68	2工区	1面	第1遺構面精査中	土師器	皿	(2.0)	10.6	—	1/4	11下	
69	1工区	1面	SK07埋土内	土師器	羽釜	(5.8)	18.1	—	1/8	11下	
70	2工区	1面	第1遺構面精査中	土師器	羽釜	(6.2)	—	—	口縁部小破片	11下	内面ハケ調整
71	2工区	1面	落込み土層	瓦質土器	羽釜	(5.5)	28.0	—	1/8	12上	内面ハケ調整
72	3工区	1面	東壁付近 第1面精査中	陶器	椀	(2.45)	—	—	口縁部小破片	13上	肥前 灰釉椀
73	1工区	1面	SP13埋土内	縄文土器	深鉢	(1.85)	—	—	口縁部小破片	14下	口縁が肥厚する
74	1工区	1面	SP13埋土内	縄文土器	深鉢	(2.9)	—	—	体部破片	14下	外面に太い沈線文
75	1工区	1面	SP13埋土内	縄文土器	深鉢	(1.75)	—	—	体部破片	14下	外面に縄文
76	1工区	2面	褐色粘質土(10YR4/6)	縄文土器	深鉢	(5.35)	—	—	底部付近破片	14下	外面に条痕
77	1工区	2面	褐色粘質土(10YR4/6)	縄文土器	深鉢	(3.2)	—	5.3	底部9/10	14下	凹底
78	1工区	2面	褐色粘質土(10YR4/6)	縄文土器	深鉢	(4.85)	—	—	体部破片	14下	
79	2工区	2面	灰褐色粘質土層	打製石器	石鏃	2.05	1.85	0.35	完形	14上	サヌカイト製

図　版

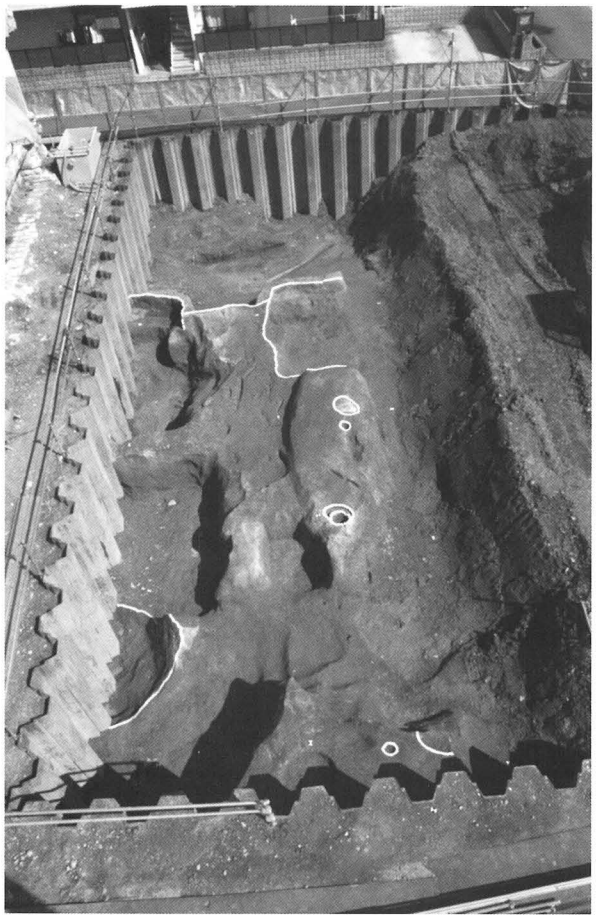
図版1　調査区遠景



1．水無瀬神宮・天王山方面を望む（南から）

2．淀川方面を望む（北西から）

図版2　第1期調査区全景



1．第２工区　第１遺構面（南から）

2．第１工区　第１遺構面（南から）

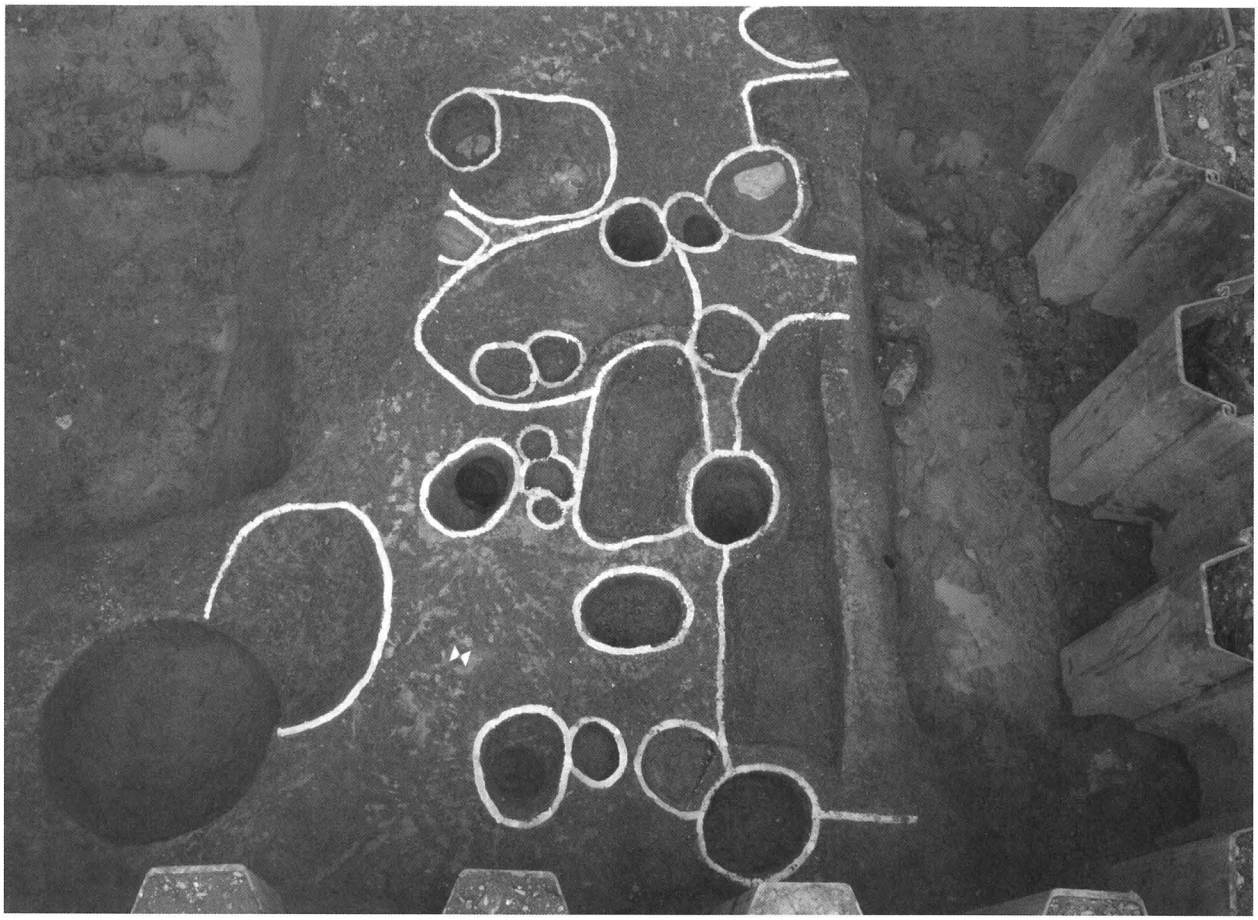
3．第２工区　第２遺構面（南から）

4．第１工区　第２遺構面（南から）

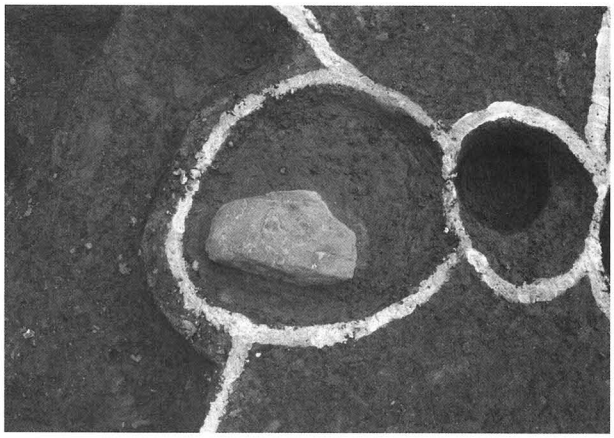
1．調査区土層断面（1）（東から）

2．調査区土層断面（2）（東から）

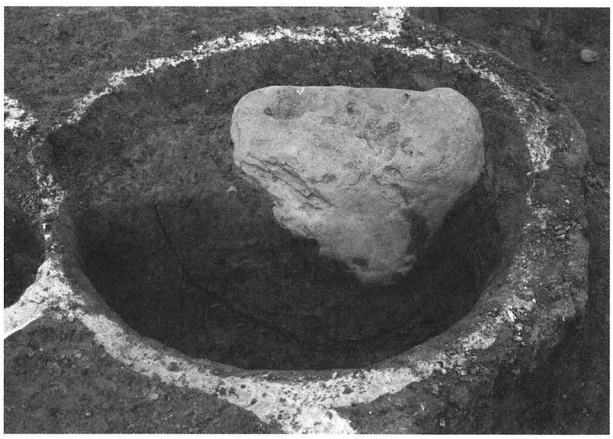
図版4　掘立柱建物　ＳＢ０１



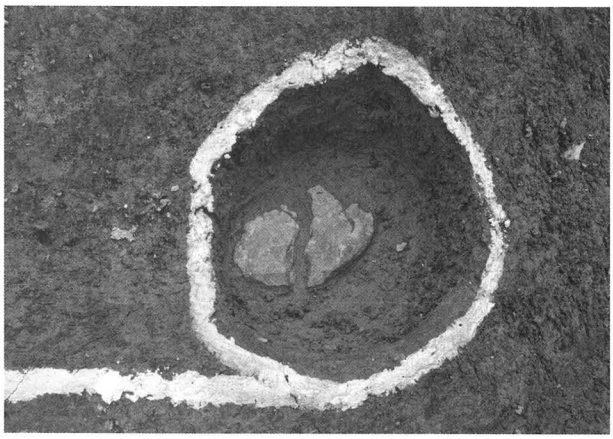
１．ＳＢ 01 全景（南から）



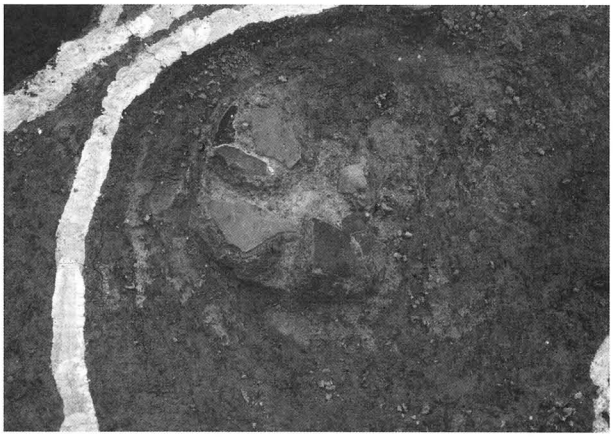
２．ＳＰ 05 根石検出状況（北から）



３．ＳＰ 05 土層断面（南から）



４．ＳＰ 17 根石検出状況（北から）

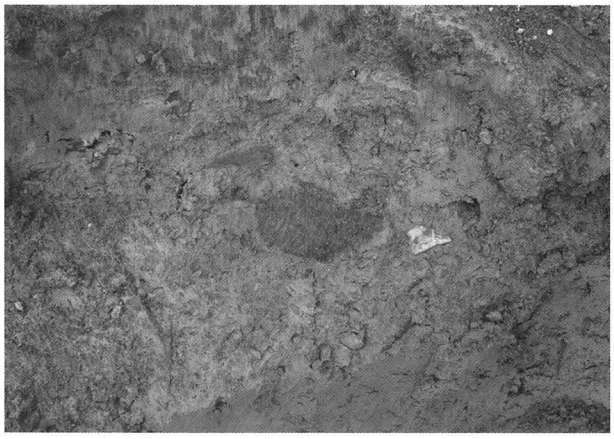


５．ＳＫ 07 遺物出土状況（北から）

図版5　第1遺構面・第2遺構面　遺構

1．ＳＫ 01 土層断面（南東から）

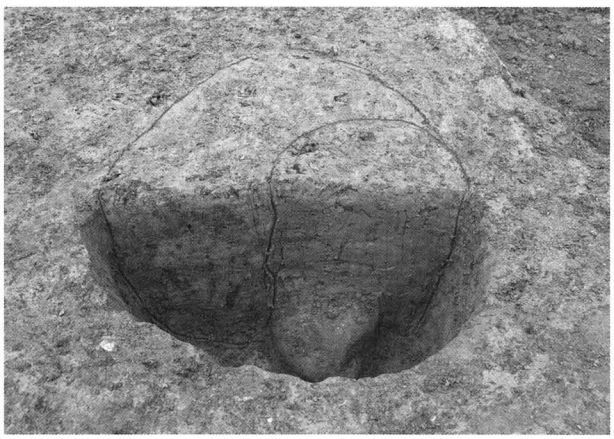
2．ＳＫ 02 土層断面（西から）



3．ＳＫ 01 草履出土状況

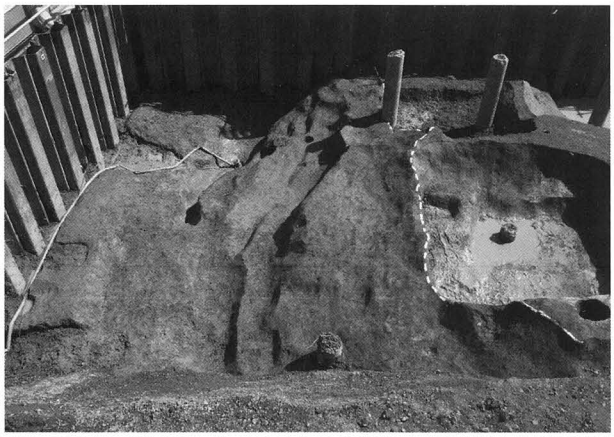
4．ＳＫ 03・ＳＫ 04 土層断面（南東から）

5．ＳＫ 10 土層断面（西から）



6．ＳＰ 29・ＳＰ 30 土層断面（西から）

7．ＮＲ 01 検出状況（西から）



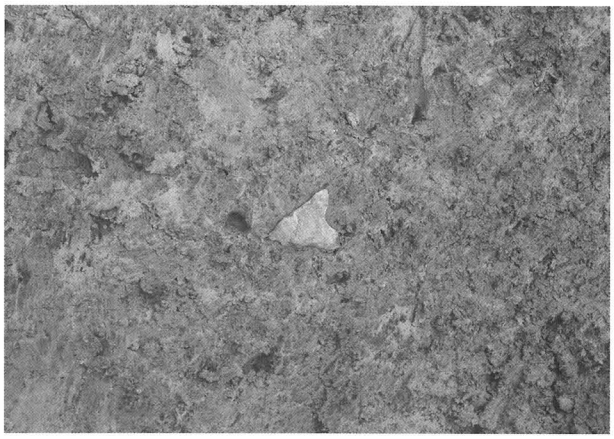
8．ＮＲ 01 完掘状況（西から）

図版6　第2遺構面　遺構・作業状況

1．ＳＸ01土層断面（南）（北から）

2．ＳＸ01土層断面（北）（北から）

3．ＳＸ01全景（南から）



4．石鏃出土状況

5．粘土採掘土坑掘削作業

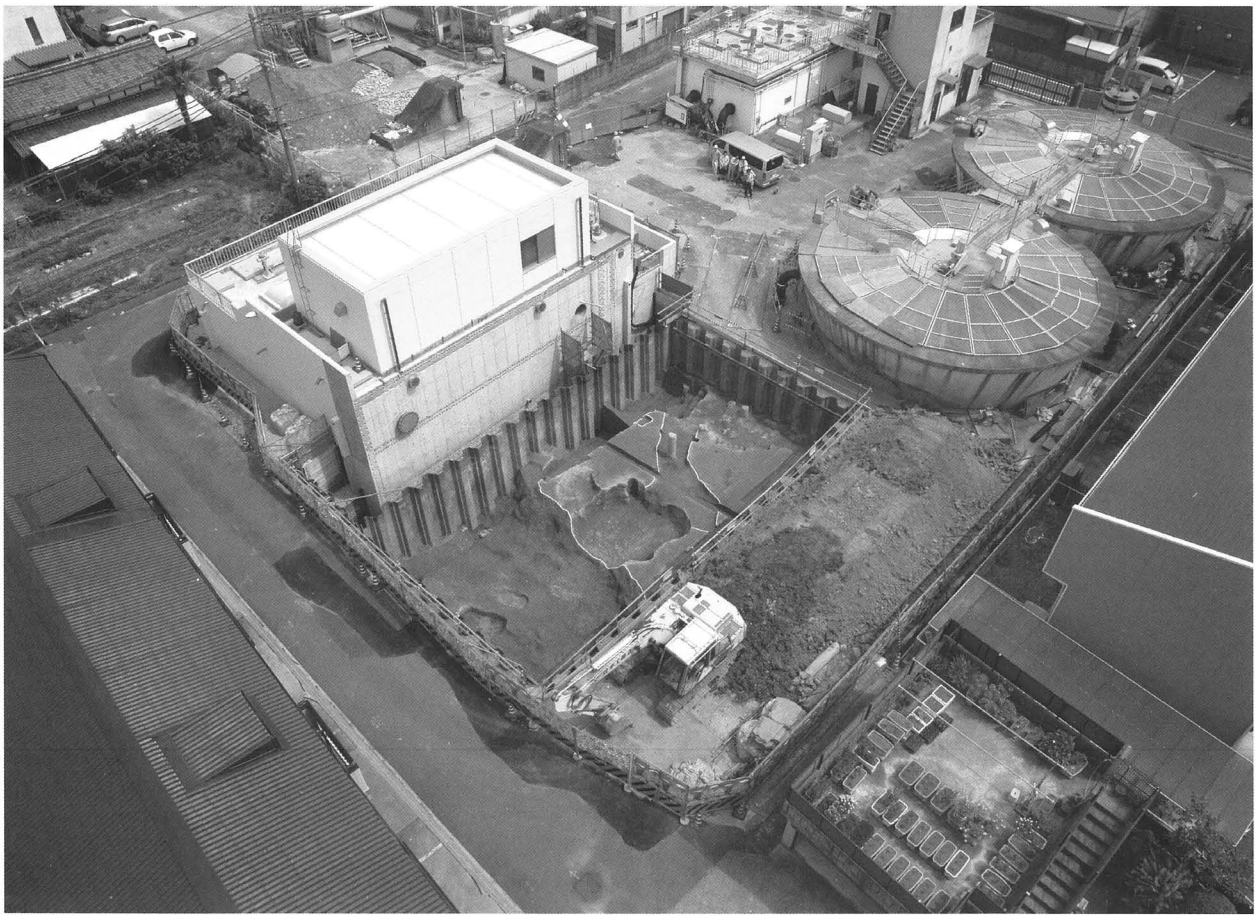
6．ＮＲ01掘削作業

7．遺構測量作業

8．空撮作業

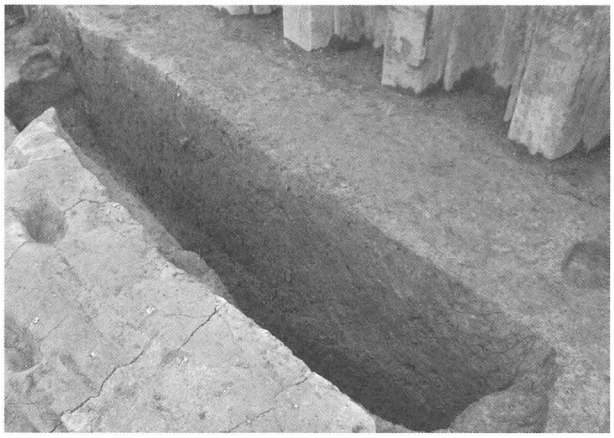
図版7　第2期調査区全景

1．第３工区　第１遺構面（南西から）

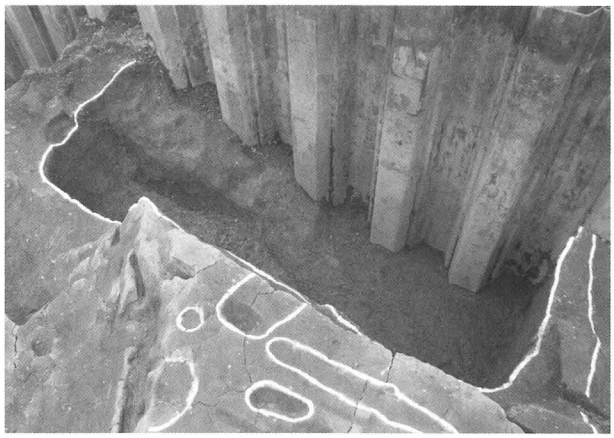


2．第３工区　第２遺構面（北西から）

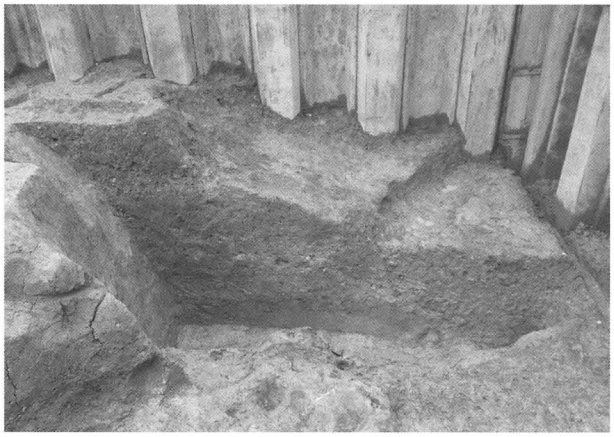
図版8　第1遺構面　遺構



1．ＳＫ 11 土層断面（南西から）



2．ＳＫ 11 完掘状況（南西から）

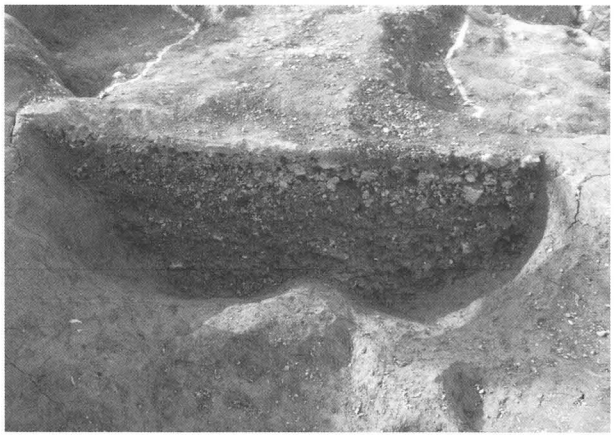


3．ＳＫ 12 土層断面（西から）

4．ＳＫ 12 完掘状況（西から）

5．ＳＫ 11 遺物出土状況（北東から）

6．ＳＫ 12 遺物出土状況（北東から）



7．ＳＤ 03 土層断面（南から）

8．ＳＤ 03 完掘状況（南から）

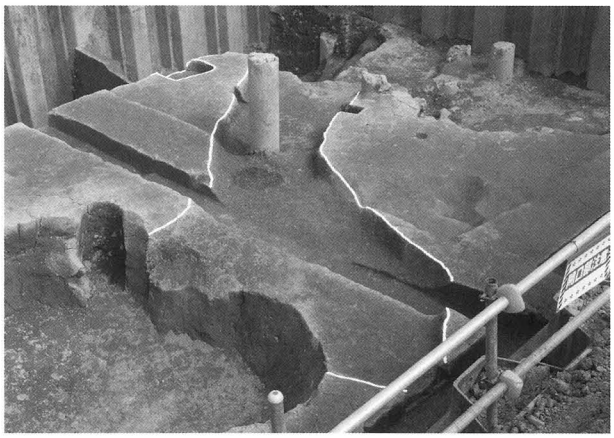
１．ＮＲ 01 検出状況（西から）

２．ＮＲ 01 完掘状況（西から）

３．ＮＲ 01 土層断面（東から）

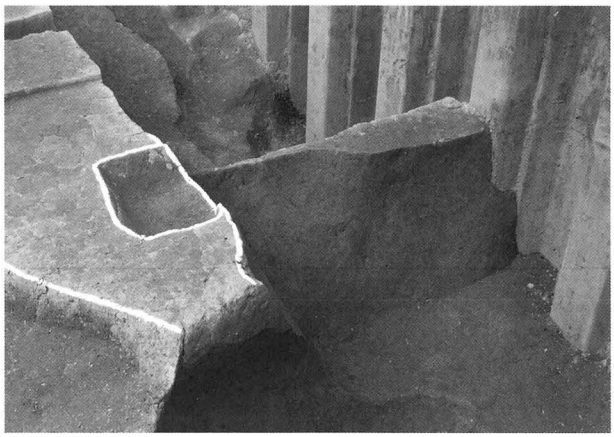
４．ＳＸ 02 土層断面（南から）

５．ＳＸ 03 土層断面（南から）



６．ＳＸ 04 完掘状況（北西から）

７．ＳＰ 63 土層断面（西から）



８．ＳＰ 63・ＳＸ 03 完掘状況（南西から）

図版10　井戸　ＳＥ０１

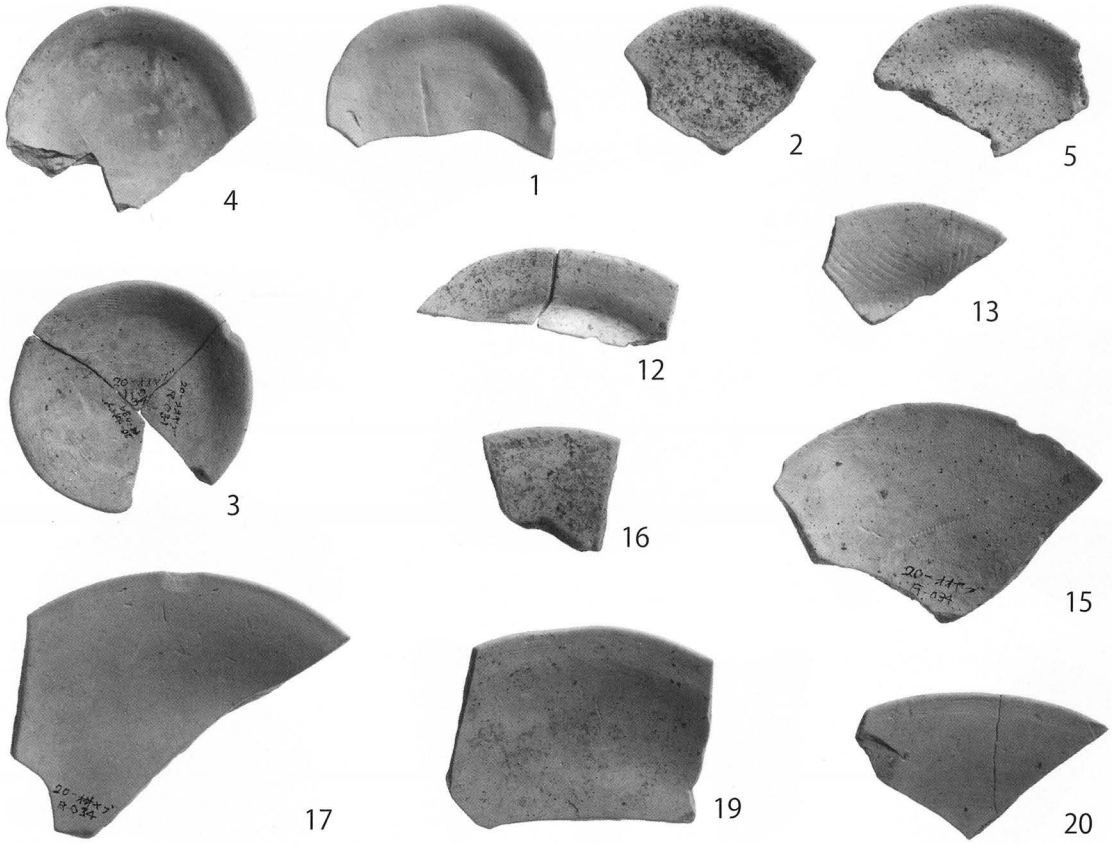
１．ＳＥ 01 完掘全景（南西から）

２．ＳＥ 01 検出状況（北西から）

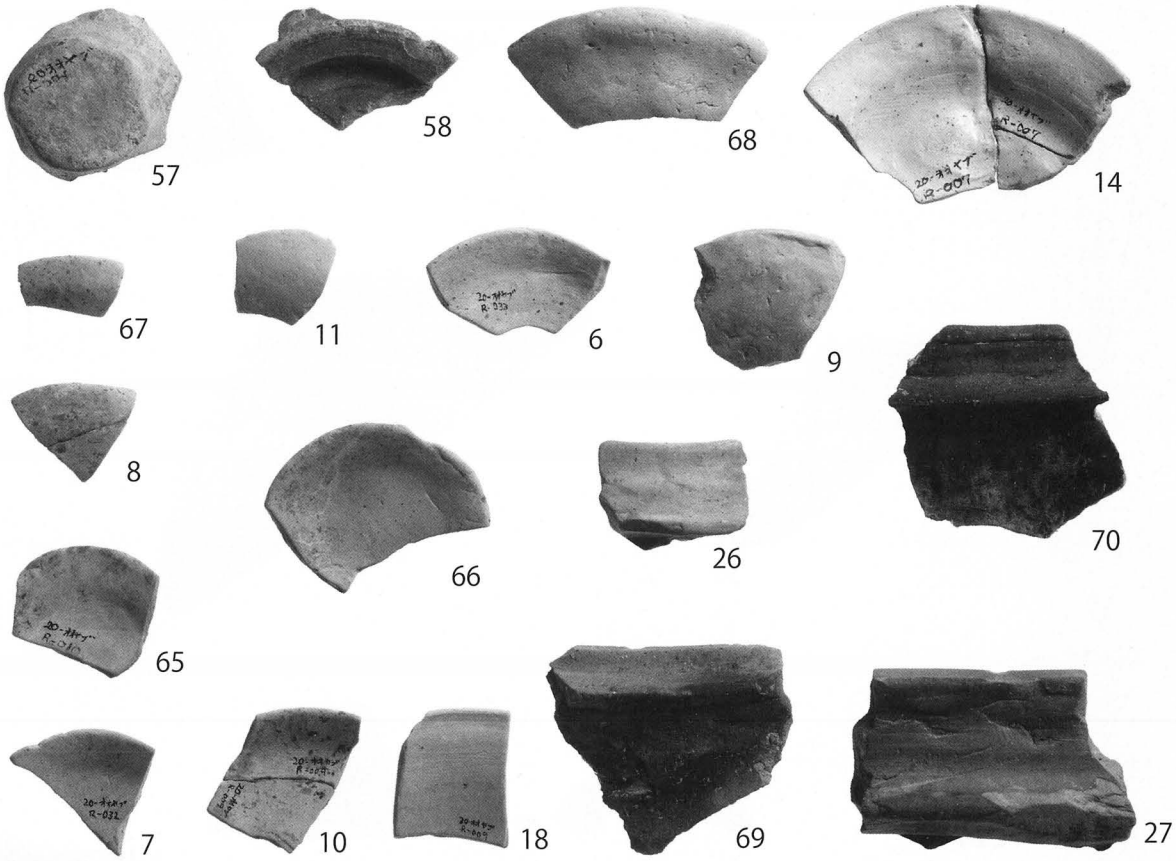
３．井戸内遺物出土状況（南東から）

４．ＳＥ 01 土層断面（南から）

５．ＳＥ 01 掘り方完掘状況（南から）

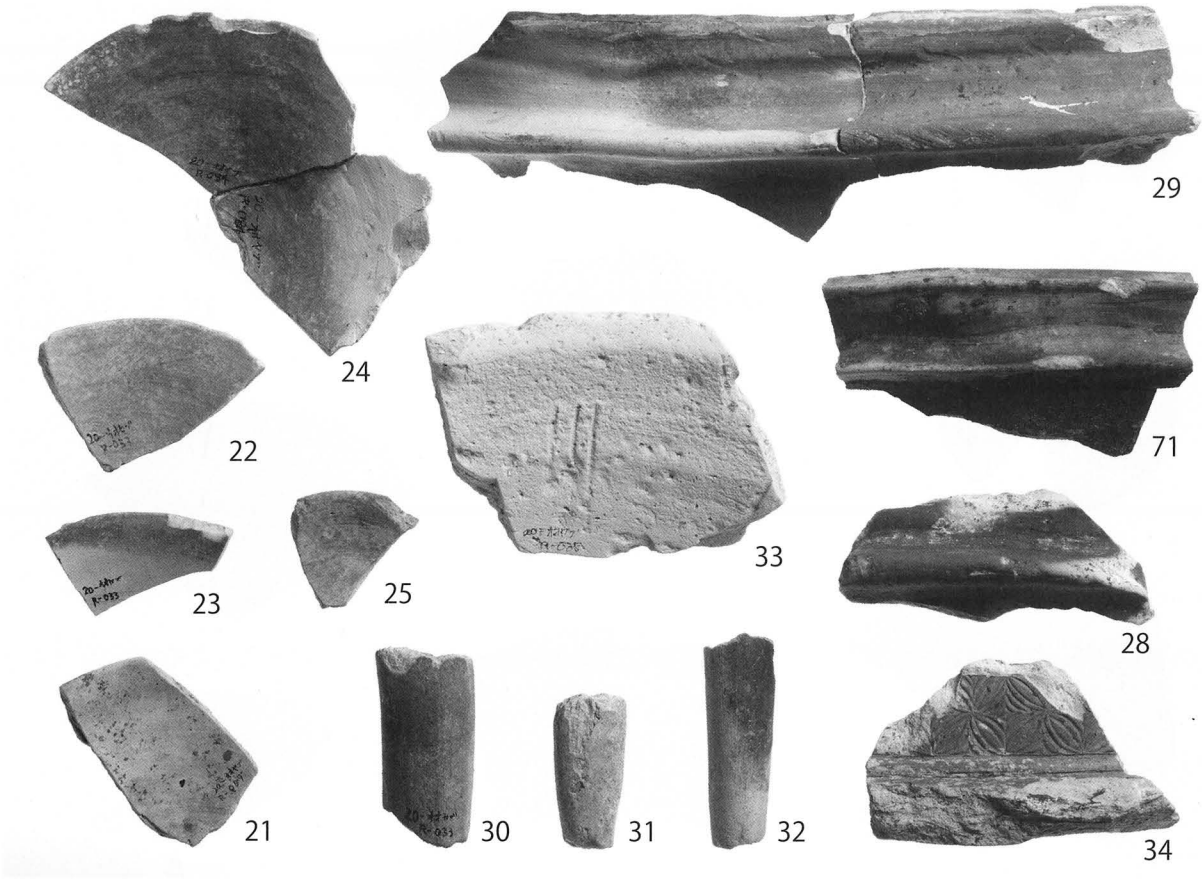


1．土師器皿

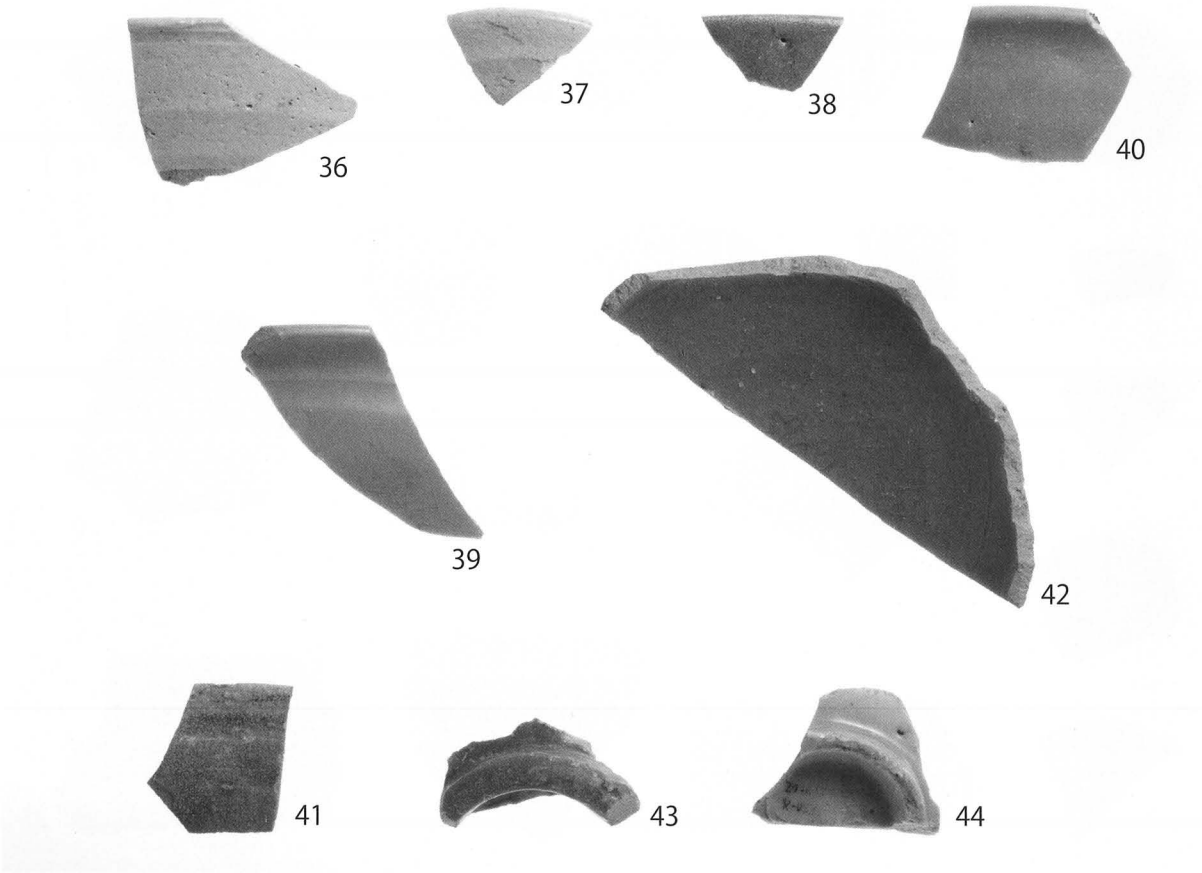


2．弥生土器・須恵器・土師器

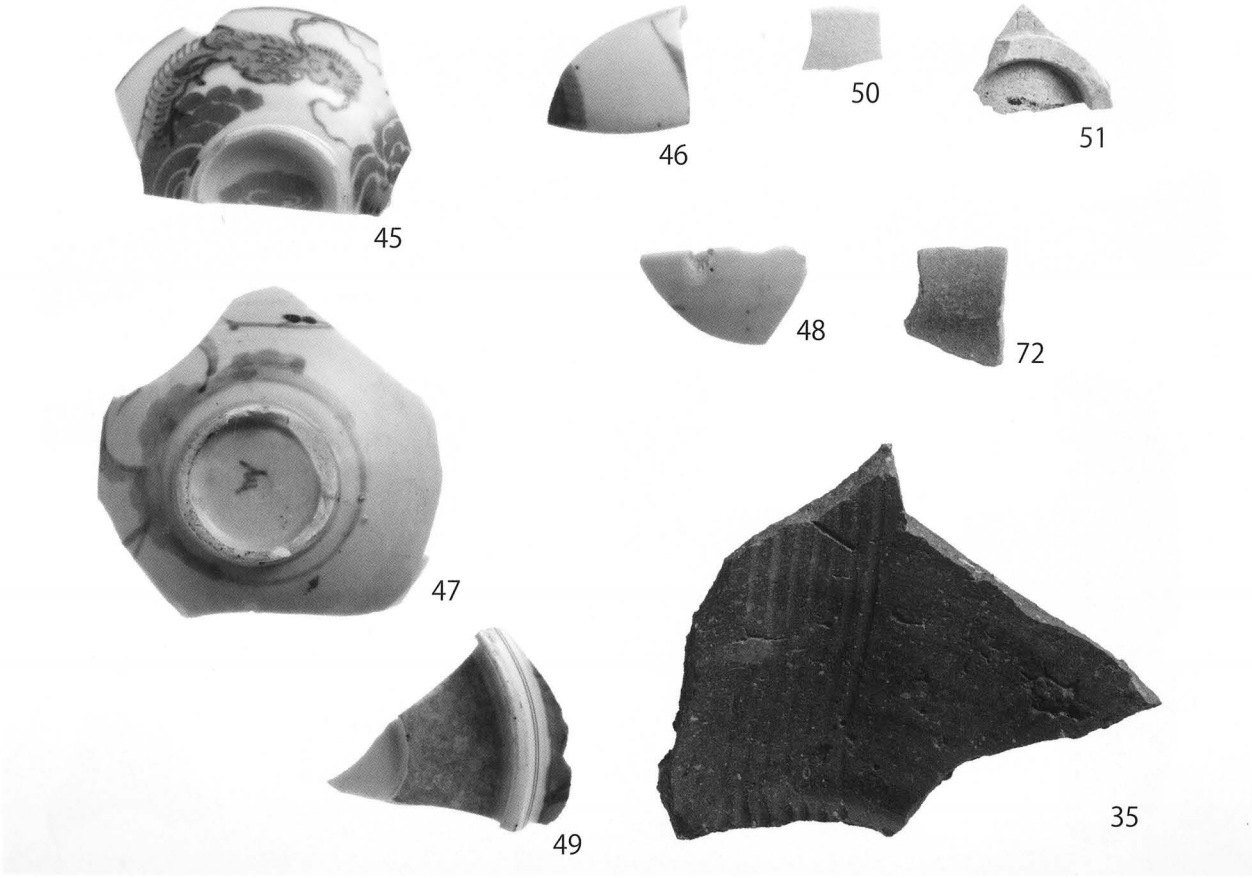
図版12　第1遺構面出土遺物（2）



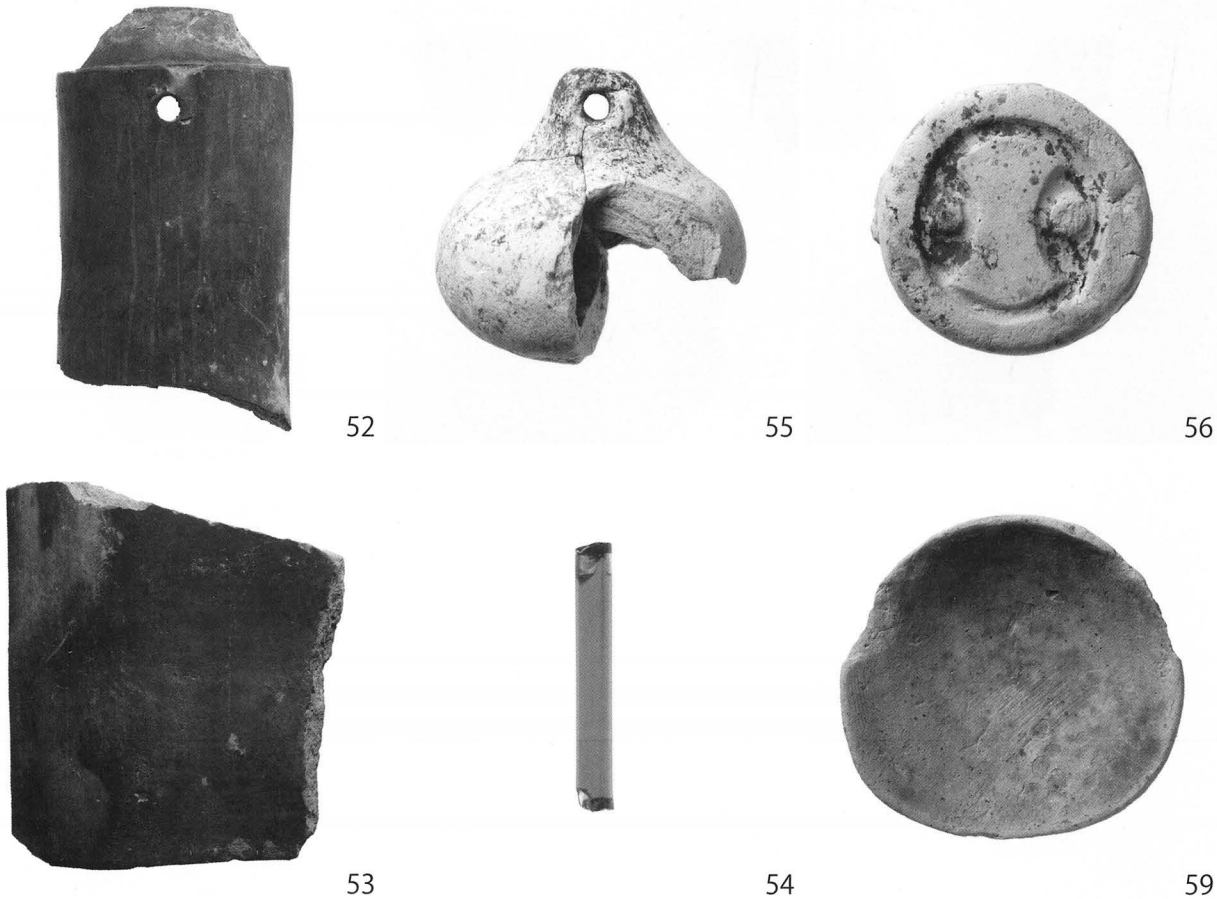
1．瓦器・瓦質土器



2．白磁・青磁

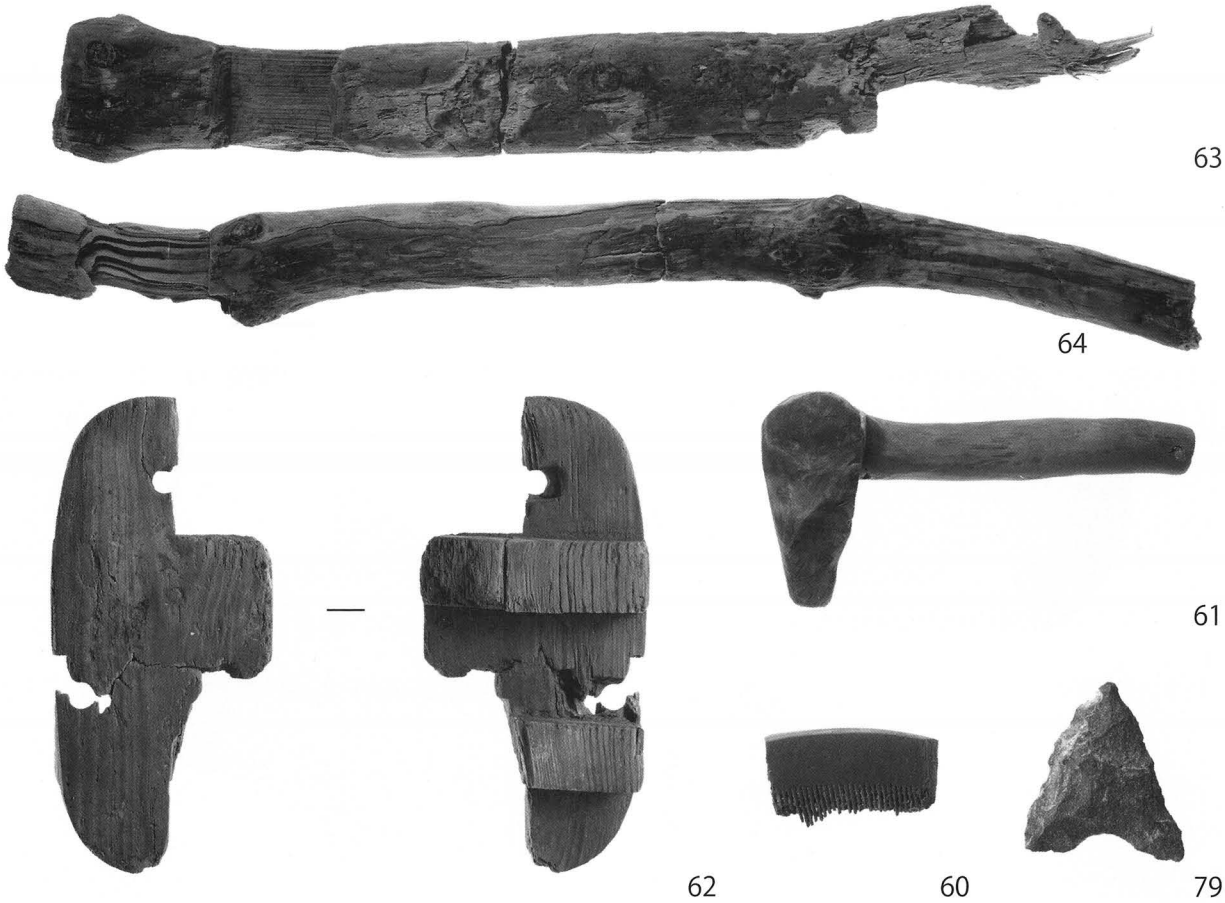


1．国産陶磁器

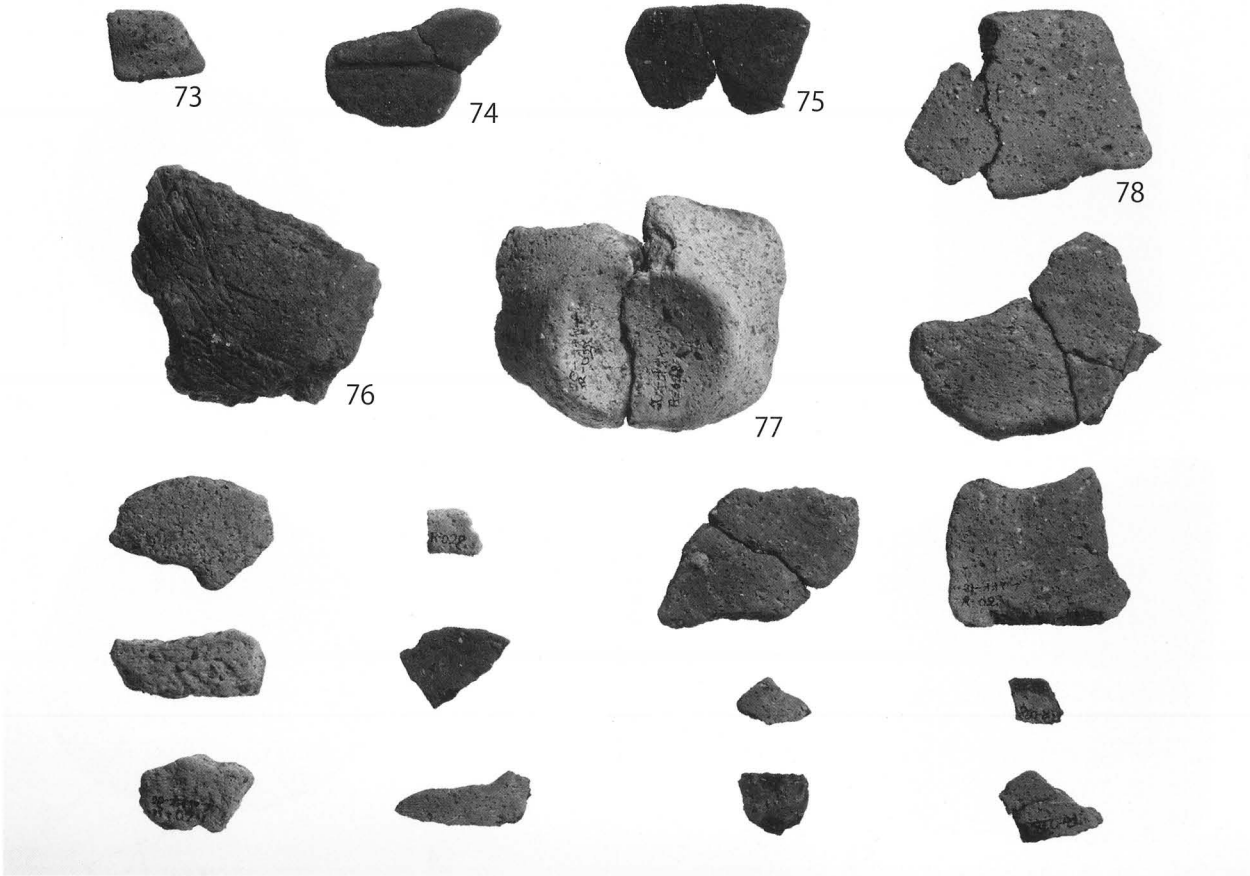


2．瓦・土製品・ガラス製品・ＳＥ 01 土師器皿

図版14　第1遺構面出土遺物（4）・第2遺構面出土遺物



1．ＳＥ01木製品・石鏃



2．縄文土器

報告書抄録

ふりがな	おおやぶじょうすいじょうろかちこうしんこうじにともなうまいぞうぶんかざいはっくつちょうさほうこくしょ
書名	大薮浄水場ろ過池更新工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
副書名	広瀬遺跡発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	島本町文化財調査報告書
シリーズ番号	第16集
編著者名	久保直子、若林純也、大西健吾
編集機関	島本町教育委員会事務局　生涯学習課
所在地	〒618-8570　大阪府三島郡島本町桜井二丁目１番１号　℡075-961-5151
発行年月日	平成22年9月10日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号				(㎡)	
ひろせいせき 広瀬遺跡	しまもとちょうひろせ 島本町広瀬 さんちょうめ 三丁目	27301	14	34° 52′ 60″	135° 40′ 29″	2009.1.30～5.29 2010.4.28～9.10	492	大薮浄水場ろ過池更新工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
広瀬遺跡	集落	縄文時代・室町時代・江戸時代～明治時代	粘土採掘土坑・掘立柱建物・ピット・溝・井戸・落ち込み・自然流路	縄文土器・土師器・瓦器・瓦質土器・白磁・青磁・陶磁器・瓦・木製品	近世以降の粘土採掘土坑を多数検出・縄文後期の遺物を確認した。
要約	広瀬遺跡は西国街道を中心に広がる奈良時代から江戸時代の集落跡である。古代には東大寺領の荘園水無瀬荘が営まれ、鎌倉時代に後鳥羽上皇により造営された水無瀬離宮跡もその範囲に含まれると考えられている。今回の調査では、２つの遺構面が検出され、近世～近代の粘土採掘土坑や中世の掘立柱建物、河川氾濫による流路跡、縄文時代後期の遺物のみられる包含層・遺構面を検出した。				

島本町文化財調査報告書　第16集

大薮浄水場ろ過池更新工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

広瀬遺跡発掘調査報告書

発　行　島本町教育委員会
〒618-8570　大阪府三島郡島本町桜井二丁目１番１号
TEL 075-961-5151
発行日　平成22年９月10日
印　刷　三星商事印刷株式会社
〒604-0093　京都市中京区新町通竹屋町下ル弁財天町300
TEL 075-256-0961